
魔王様のお気に入り

梅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王様のお気に入り

【Nコード】

N5448T

【作者名】

梅

【あらすじ】

《魔王》を倒す為に、《勇者》として日本から召喚されました。最初こそ抵抗してみたりしたけど、大切な友人が出来てから、この人がある世界を守りたいとか思っ、二年間頑張っ、漸く今日。《魔王》を倒せば平和な世界に！なんて魔王城へ乗り込んだのに、玉座はもぬけの空だし敵揃ってるし……しかも、なんで貴方がその玉座に堂々と座る訳！？え、「結婚しよう」？……はあああ！？基本コメディ、ときたまシリアス。主人公チートですが、主人公のチートが霞む程魔王様は超チート。

プロローグ

血とか骸骨とかで飾られて、悪趣味に違いないと思っていた城は、意外な事に美しかった。

控え目に飾られている絵画や、装飾品の一つ一つは、金も銀も使われていない。

豪華というより、静粛。煌びやかというより、清閑。

だというのに、何処か気品を漂わせて侵入者であるイオリを出迎えた。

”真人類帝国”の城のほうが、よっぽど悪趣味じゃない。

これが、正式な招待を受けていたら、きっとイオリは控え目ながらも緻密で繊細な城内の様子に目を奪われて、はしゃいでいたかもしれない。

だが、今は何よりも優先すべき事があるのだ。

チラリ、と流れる景色を横目で見送るに留めて、疾風のようにイオリは城内を駆け抜けた。

巨大な観音開きの扉の前で、イオリは足を止めた。

「ううね……」

此処に、全ての”元凶”が居る。

始まりは、二年前だった。

それから幾つもの紆余曲折を経て、漸く、此処まで辿り着いたのだ。

あと少し。あと少しで……。
いけない、感傷に浸るのは全てが終わってから。

イオリは一つ息を吐き出すと、扉を　扉の先に居るだろう人物を睨み付けるように、空色の瞳を細めた。

自分達に残された時間は、とても少ない。

戦いの最中に護衛達が総出で妨害してきたら、如何イオリであるうと、命は無いだろう。

命を捨てる覚悟ではあるが、むざむざとくれてやる気等さらさらない。

イオリは左手に”風”を纏わせると、勢い良く扉に叩き付けた。

到底イオリだけの力では開きそうに無い観音開きの扉が、バアン！と開く。扉が開き切る前に、開いた隙間から素早く室内へと飛び込んだイオリは、ミスリルで作られた細剣レイピアを腰から抜き放つ。

落ち着いた臙脂色えんじの絨毯を駆け抜け、階段の先に在る”玉座”へ
向かい剣先を突き付けようと。

「ッ……！？」

主の居ない、玉座。

玉座へと続く絨毯の左右端に、ずらりと並ぶ兵士達。

そして、より玉座に近い場所には、他の兵士達と一線を画す六人の人物達。

その全員が、まるでイオリが来る事を最初から分かっていたかのように、イオリへと視線を向けていた。

イオリがこの城へ侵入して、まだ五分と経っていないのだ。

いずれは感付かれると思ってはいたが、まさかここまで……もしや、計画が漏洩していた？

あの六人は”六柱”と呼ばれる存在。

一人一人相手にするなら、イオリにも未だ勝算はある。

だが、六人全員を一斉になると、背に冷たい汗が流れるのを止められなかった。

イオリは急いで背後を振り返った。

せめて。せめて、この人だけは。

イオリ ことなしイオリ 琴梨伊織が、《魔王》を倒す為の”切り札”として、

地球からこの平行世界である《ガイアス》に召喚されてから、ずっとイオリを隣で支え、共に戦い、弱気になった日には励ましてくれて、信頼している友人。

「リーヴ！貴方だけでも、逃げて！」

異世界トリップのお約束・王道で、イオリは強い。

だが、情報が漏れていたらしい。魔王が玉座に居ない以上、最早イオリが魔王を討ち倒すのは難しいだろう。だが、”六柱”とこの城を壊滅させ、城ごと”封印”してしまえば、数十年。否、少なくとも数百年は、魔王は活動出来ないだろう。

ずっと、ずっと助けてくれた人。

最後まで、私が貴方を。

イオリは彼の周囲に、物理攻撃も魔法も通さない特殊な防御壁を作ろうと手を虚空へ伸ばした。

その動きが又停止する。

「御帰りなさいませ、我等が主」

冷酷で、慈悲の欠片も無いと言われる”六柱”を筆頭に、其処に居たイオリを除く全ての者が恭しく跪いた。いや、もう一人を、除いて。

ちよっとまで、今何て言った。

「ただいま。 御免ね、仕事を押し付けて」

黒曜石のようなサラサラの黒髪が揺れる。

イオりに微笑み掛ける表情はとても穏やかで、優しくて。
柘榴石色の瞳が、奇麗に細められた。

ちくしょー、こんな時でも奇麗ですね！混乱し過ぎてイオりは涙目である。

フ、と笑って頭を軽く撫ぜると、青年は迷いの無い足取りで絨毯を進む。

向かう先は 玉座。

黒曜石を削り抜いて作ったらしいシンプルな玉座に、銀と金の刺繍が施された臙脂の飾り布が、当然のように座る青年に似合いすぎている、イオりは喚きたくなった。

信じられない、ありえない！

「初めまして」、《勇者》イオリ。 俺が《魔王》だよ」

コノヤロー騙してやがったな！

私の味方だよって、言ってくれたのに！

絶望感と喪失感に苛まれるイオりに、《魔王》は艶然と微笑んだ。

「さてと、自己紹介も済んだし
イオリ、結婚しよう」

ずっと、この日を待っていた。

その一歩

悪夢を見た気がする。

二年越しの努力を実らせて、魔王城へ乗り込んだら情報が漏洩していた。

しかも、ずっと支えてくれていた友人がニツコリ笑顔で《魔王》発言。

冗談でも笑えない。わるえない。し、しかも何かあまつさえ、けっこ……いやいや聞き間違いに違い無い。というか夢だしね、うん。

「おはよう、イオリ」

夢オチじゃなかったああああああ！

天蓋付きの豪華なベッドに白いワンピース一枚で寝ていたイオリは、目覚めた直後からシーツを頭からすっぽりと被って、悪夢の出来事を忘れようと現実逃避していた。

だが、どうやら一人の時間も許しては貰えないらしい。

フトした拍子にシーツが捲くられ、呆然としているイオリの目の前に 気付かれずに一体どうやってなのか甚だ疑問ではあるが、

同じベッドに横たわって口元を綻ばせる《魔王》がいらつしやいました。まてまてまで、確かに私は貴方と二年間行動を一緒にしましたが、宿屋でも部屋は別だったしこんな近くでそんな綺麗な顔で笑わないでください。

「寝癖が付いてるよ、……かわいい」

「ふぎゃー！」

何か人間じゃない悲鳴を上げた気がするが、それどころじゃない。男性の手とは思えないくらいに、整った指をスルリと伸ばして、彼はイオリの前髪に触れた拳句、シーツに広がる黒髪を一房掬い取ったと思ったら。

騎士がどこぞのお姫様にするように口付けた。うわあああ何の乙女ゲーですか。

現実世界でそんな事を行った日にはドン引きされる事請け合いなのに、それをサラリと、しかも完璧にやってのけた《魔王》は目の前の少女へ慈しみと愛おしさに溢れた眼差しを送っていたが、思考が追い付かず真っ白気味になっているイオリは気付いていない。

「り……り……グ？」

「なに？イオリ……イオ」

駄目だ思考がぐるんぐるんと渦を巻いている。船酔いしそう。

これは悪夢の続きなのかと、試しに彼の名前を呼んでみたら、至極嬉しそうに笑って彼だけしか言わないイオリの愛称まで呼びだす始末。

し、しかも今迄ずっとフランクな呼び方だったのに、何やら今はとつても、とつても熱というか、い、いいいい色気みたいなものが混じってませんか。負けるな私。

確認しなければ。

「リーヴが……《魔王》？」

「うん、そっだよ」

「……っ…だまして、た…の……？」

夢であつて欲しいという願いは、あつけらかんと打ち砕かれた。

では、最初から彼はイオリの傍で、応援するフリをしながら、イオリが奮闘する様を影で嗤っていたのか。いつでも、殺せるのにと？

涙が滲む。これは怒りか、悲しみか。

ある日突然現代日本から《ガイアス》へと一人召喚され、悪の化身である《魔王》を倒してくれと真人類帝国の国王から直々に頼まれて。

日本では髪の毛一本の靈感とか不思議な力とか持っていないかったのに、この世界では本来必要である呪文すら必要とせず魔法を使えて、使えもしない剣を師範代の如く使えて。それでも、知り合いが一人もいない見知らぬ世界で不安だったイオリを支えてくれたのが、彼 帝国付き魔法剣士のリヴェンツェルだった。

この世界に召喚されて、空色に変わってしまった瞳の色を戸惑うイオリに、綺麗だねと言ってくれて。

初めて魔物と呼ばれるモノを倒した時の、斬った感触に震えが止まらない身体が落ち着くまで抱き締めてくれて。

初めて食べる料理が美味しく、感動していたら笑ってくれて。

魔物の奇襲を受けた時、全力で守ってくれて。
自信が無いと、漏らした時　何があっても、味方だよ、と言っ
てくれて。

嬉しかった、本当に嬉しかった。

イオリを利用する為だけに、異世界から召喚した帝国の為ではな
くて。

支えてくれるこの、大切な友人が住む世界を守りたいから。

だから、イオリは《魔王》を倒す事を目指していたのに。本末転
倒だ。

「騙してたのね！ずっと、ずっと私を笑って」

喉が震えて、悲鳴染みた声が部屋に反響する。

ヒステリックな女は嫌われるのに。それもこれもコイツのせいだ。
直ぐ近くの胸板を強く押すと、その反動でイオリはベッドから飛
び降りた。その俛、壁に立て掛けられていた自分の細剣レイピアを手馴れた
動作で抜き放ち、《魔王》へ切っ先を向ける。

あの時、玉座の間での出来事が余りに衝撃的過ぎて意識がブラッ
クアウトしたが、その後はどうやらこの部屋に運ばれたしい。落ち
着いた内装から、魔王城の一室に間違い無い。

つまり、自分以外皆敵　何故未だイオリが生かされているのか
皆目見当も付かないが、生きて帝国迄逃げるのは不可能だろう。そ
れなら、《魔王》くらい倒してやろうではないか。

怒りや憎悪というものは、容易く人間の心を燃え上がらせる。

感情に任せて魔力を放出した為、イオリの髪がフワリと浮き上がり、狐火のような小さな蒼の焰が瞬き始めた。それに呼応して、ミスリルの細剣も蒼い焰を纏う。

黒の髪と、蒼の焰に揺らぐ空色の瞳は最早人間の其れではなく、凄絶に、触れれば切れる程美しかった。今のイオリなら”六柱”全員が挑んでも、勝てたか分からぬ。だが。

「イオ」

「！」

じゆう、と肉の焼ける嫌な音がした。

ゆっくりと立ち上がったリヴェンツェルは、蒼い焰も、向けられた剣先も全く見ず、イオリの瞳だけを柘榴石色の瞳で唯真つ直ぐに見詰めて、あるうことか、高温を纏う剣を自らで握り締めた。自分がやろうとしていた事だというのに、イオリは驚愕に目を見開く。余りの驚きに魔力は霧散し、一瞬で焰は空気に溶けた。

何をしているのだ、この人は。ああ、綺麗な肌が爛れて

カラン、と手から細剣が床に落ちる音も、何処か他人事。

「イオリ……イオ。俺は、君がそう望むなら、君に殺されてもいい」

「は」

「でも、出来れば君と一緒に居たい」

「あ」

「君を、愛してるから」

泣きつ面に蜂ってこういう事？

唯でさえ崩壊気味だったイオリの思考は、完全に崩壊して、冷静

とか落ち着きとか、そういった類の単語をオールスルーする事にした。ブレイク万歳。逃避逃避で目をしっかり閉じる。

「……イオ、泣くな」

泣いてない。絶対に泣いてない。これはきつと目からの汗だ！
利用される為だけに召喚されて、信じてた友人にはガツツリ裏切られてついでに《魔王》で、しかも何かああああ愛してるとか！もう訳分らない！私の二年は何だったのだ！
もう嫌だ。何も見たくない。

「……俺を、見て」

嫌だ。リーヴなんて嫌いだ。あつちいけ。もう騙されんぞ。

固く閉じた目からは次から次に涙が溢れて、頬を伝う。これは痛みだ。

《勇者》と言われても、召喚された時イオリは16歳、今だって18歳。

類稀なる力があつたとしても、心は未だ未成熟。

「イオ」

ふわりと、頬に温かい何かが触れた。

小鳥が啄ばむように、軽く、それでいて確かに。

「イオリ、目を開けて」

優しく、穏やかな低い声が何度もイオリを呼ぶ。

涙の零れる頬に温もりが触れると、漸くイオリは緩々と瞼を開いた。

間近で瞬く、強い石榴石色ガーネットの瞳が美しい。

「泣かないで」

まるで、赤子をあやすように、低い声は囁いた。

リヴェンツェルの唇が、何度も頬に触れ、目尻に触れ、額に触れ、こめかみに触れて、何度もイオリの名前を呼ぶ。泣いているせいで朧おぼろな意識の俛、イオリの瞳と宝石のような瞳の視線が重なると、嬉しそうに彼は笑った。

「イオリ。嘘を吐いていて御免、でも……君の味方だと、言った言葉に偽りはない」

「リー……ヴ」

「君に出逢えてから、俺は世界ではなく、唯一人を求めた」

ほろり、と零れた涙を、リヴェンツェルの舌が掬う。

熱い。リーヴの声も、空気も、そして触れる唇も。

其処に居るのは、二年間共に過ごした友人であり、全く知らない異性。

「未だ混乱してる。少し眠って……起きたら、全てを話すから」

少しだけ、お休み。

そう言っただけ、リヴェンツェルはイオリの額へ口付けた。

ゆっくりと、意識が眠りに沈んでゆく。

力を無くす身体をしっかりとした力が抱く。

優しい声が何かを囁いた気がした。

その一歩（後書き）

あ め え w

砂糖大盛り十杯くらいですか。魔王様が甘いのは主人公にだけです。というかこれくらいはいちやつきはセーフなのか、アウトなのか…。

その二歩

二度寝しても、見上げた天井は天蓋付きの豪華なベッドでした。ちくしょう。

「夢じゃ、ない……」

寝過ぎで逆にぼんやりとする頭を、枕へぼすりと倒しながら、イオリは乾いた笑いを漏らした。いや、枕もベッドもかなり気持ち良くて爆睡してましたが。それはそれ。

何回寝て起きても、此処は魔王城。

友人だと信じていた人が《魔王》で。

それでもって、信じられない事に「愛してる」と言われました。

唯一人。

唯、一人を求めたって。

あれ、なんかあの台詞って口説き文句っぽくないか？

しかも混乱してて訳分からなかったけど、そ、その、色々なところカーネットに、リーヴの唇が、ふふふふふふ、触れた気がする！あの熱さを、柘榴石の瞳に煌く焰の名前を、イオリは知らない。

「うあ、あふ」

言語機能が完全に麻痺した。

きつと今は三歳児の子供より衰退している。何か言おうとしても、あうあうと唇が意味の無い言葉を無情に漏らすだけで、明確な単語が結びつかない。

ベッドの上で悶絶しながら、イオリの指は自然と《魔王》の唇が触れた頬や脛にそつと触れて、熱いものを触ったようにパツと離れるを何度も繰り返した。意識を失う前の、あの瞳を思い出すようで、小さく震える。

ふと、枕元に置かれている封筒に視線が向いた。

淡いクリーム色の封筒は、よくよく見ると全体的に美しい蔦模様が入れられていて、微かに煌くのは、金粉も一緒に入れられているからだろうか。どちらにせよ、かなりの高級品である。

恐る恐る中身の便箋を取り出すが、便箋もこれもまた高級品だった。一体誰が、と、冒頭の文章に落とされた視線が硬直する。こここここの文字は。

イオリ

お早う、もう目は覚めたかな。

昨晚は驚かせてしまって、御免ね。

君に真実を告げたい。そして、俺の気持ちも。落ち着いたらその服を着て、大広間へおいで。待ってる。

リヴェンツェル

読み終えた途端に、緊張の糸が切れてイオリは再びベッドへ突っ伏した。

現代日本から召喚されたイオリは、勿論この世界ガイアスの言葉や、文字を全く知ら無い。だが、諸々のチート能力の中に、言語能力もプリセットされていた為、日本語でも英語でもない文字をスラスラと理解する事が出来た。

今に限っては読めなかった方が嬉しい気がする。

顔を横に向けると、ベッドから窓が見えた。

イオリと同じ空色　雲一つ無い朝の青空。ちちち、と白い鳥が何匹か空を飛ばたいいて、実に平和そうだ。言われなければ、知らなければ、此処が魔王城だとは誰も思わない。

事実、囚われの身である筈のイオリには鎖の一つも繋がれていないし、今はワンピース一枚だが衣服や防具、武器等全ての持ち物がベッド脇のテーブルへ丁寧に置かれていた。

昨夜の悲愴感は、もう無い。

誰に対してか分からない、微かな怒りは未だに心の奥底で燻っているが、今はイオリの怒りよりも真実を探求する心のほうが強かった。

ワンピースを脱ぐと、イオリは丁寧に置まれていた自分の服に着替えた。

黒いハイネックのノースリーブと、薄い青のスカートにスパッツ

とブーツ姿はちょっと見れば随分頼り無い衣服だが、これら全てが精霊達から”祝福”の施された服である。

竜の牙をすら弾く強度を持つ。チート装備。

これに防具を纏えば、ほぼ完璧なのだが、イオリは迷った拳句に結局は防具を着けない俛、自分の武器である細剣が括レイビダられたベルトだけを片手に、部屋を出た。

あれ、そういえば大広間ってどこ？

「……起きたか」

「っ！」

地を轟かすような、寧ろ地を這うようなビリビリとした低い声が直ぐ脇から響いて、イオリは横へと蛙よろしく飛び退った。直後に大きく目を見開く。

二メートルはあろうかという巨軀を黒い甲冑に纏い、同じく巨大な黒馬で戦場を駆ける死神 ”六柱”の石柱、アンデルベリ！

なんだ油断させておいて、やつぱりがつつり殺ヤる気だったのかばつきやるー！という恨みに任せて細剣レイビダの柄にイオリは手を掛けたが、対する巨軀の男は一度鋭い金色の瞳を瞬かせただけで、あっさりとイオリに背を向け、歩き始めた。あれ？

「……案内する」

……はて？

非常に語句が少ない為、理解するのに時間が掛かったが、どうやらこの巨大熊……いやいや、死神の魔族はイオリを大広間へ案内する気らしい。リーヴに頼まれたのか。

少々不躑な視線を背中に飛ばしてみたが、蚊が刺した程の威力も無いようだ。何か虚しいんですけど、それはそれで。脱力しつつも、城の内部を知る筈の無いイオリは重い足取りで見失う事の無い背中を追って歩き始めた。

案内してくれるのは嬉しいが、人選をして欲しいものである。朝っぱらから不吉オーラ満載のこんなのに声を掛けられた日には、死亡フラグが幾つあっても足りない気がします。

だってこの人（？）の周りだけ黒い！暗い！並んで十人は通れそうな廊下の至る所に採光の大窓があつて、朝日が燦々と注いでいるというのに、この死神が通る時だけ闇が差しているのだ。

部屋を出た瞬間に襲われる、という誤解をするのも無理からぬ事だろう。

そんな考えをつらつらとしていた為か、ふと死神が歩きを止めない俣チラリと寄越した視線にばっちりがっちり掴まってしまい、思わずイオリは戦慄した。

ゆつくりと、一度だけ猛禽のような金色の瞳が瞬く。

「何故」

「……え？」

「貴女は」

質問しているのは分かるが、言葉が極端でぶつ切り過ぎて理解出来ない。

何故貴女は此処に居るのか？だろうか。だったら私が聞きたい私に聞かないでください。

目を白黒させていると、意思疎通を諦めたのか、フツと軽く息を吐き出してアンデルベリは再び前を向いた。待て、今の溜息は何か

馬鹿にされた感じがするんですけど！

単語じゃ分かりませんが、ちゃんと文章で話さない！

イオリは抗議しようとして口を開き掛けたが、立ち止まった巨躯の向こうに扉が見えると、思わず息を詰める。大広間、だろうか。

「中に」

「は」

「全員、揃って」

まてまてまて！

今、ぶった切りの単語に恐ろしいものを混ぜませんでしたか？

全員というのはあれですか、余り会いたくない《魔王》と、貴方を含む”六柱”ですか？

つい昨日まで、倒す事を宿願としていた存在含め、その懐刀達、全員？

顔色で考えた事が分かったのか、コクリと死神が頷いた。さあつと血の気が引く。

駄目だ、ここを潜った瞬間に、血の雨が降る。矢とか飛んでくる。

現在着ている服だけでも、矢が貫通する事はまず有り得ないのだが、昨夜からイオリの決意とか、意思とか、そういったものは全てベキベキのボキボキに折られている為、非常に消極的且つ臆病になっていた。

正直に言っと、怖い。むりむりむり。とりあえず一人だけにして欲しい。

「早く」

「あ！」

中々扉に近付かないイオリに業を煮やしたのか、これまたぶつ切りの単語のみで急かすと、まるで子猫を扱うようにイオリの首根っこを掴んで、ぽいと。

ぽいっと、放り込んだのだ！信じらんない！心の準備くらいさせてくれたって！

「イオ」

ああ、^{ガーネット}石榴石色の綺麗な瞳が、笑っている。

《魔王》 リヴェンツェル、リーヴ。

その三歩

初めて彼と出会ったのは、イオリがこの世界に召喚された数日後。まだ異世界に来た事が実感出来ずに呆然としてたイオリの前へ、幾ら《勇者》とて、一人では大変だろうと、”真人類帝国”でも屈指の実力を持つ有能なサポート役として紹介された。

あの時はたった一人だけ！？体のいい厄介払いじゃないか！と反発もしたけど。

最初はこんなに綺麗な人が男の筈がない！なんて、ショックを受けたものだ。

身長は180センチくらい。ちよつと見ただけでは、男性にしてはかなり細いが、猫科の獣を思わせるしなやかでスラリとした羨ましい体型。睫毛長いし、ウルフカットの髪は黒曜石みたいにツヤツヤしていて、肌も不健康ではないがとても白い。年齢はその時21。

何よりイオリは、瞳に惹かれた。

見たことも無い、切れ長の ガネット 石榴石の瞳。

此方を見るちよつとした角度の違いで、溶岩の様に苛烈に、上品に淹れた紅茶のように、煌いて色を変える。

日本に、いや、地球にこの人が居たら絶対世界トップスターとかモデルになれるに違いない。いやいや、他のモデルと比べるのもおこがましい。それくらい、印象的だった。

絶対戦えないだろうと失礼な事を考えていたのに、ある意味期待を裏切つて剣も、魔法もかなりの腕だし、彼はとても知識が豊富で、

それを誰かに教える事が上手かった。

この世界へ急に放り出されて途方に暮れていたイオリへ、根気良く、丁寧に、一緒に世界を歩いて、この世界の事を教えてくれた。とても楽しい”授業”で、一時期はふざけて”先生”なんて呼んでいたくらいだし。

しかも、性格だって爽やかで、紳士で。

友人で、先生で、パートナーで…… そうだ。

一人っ子のイオリに、兄がいたら、こんな感じかなって。

おもって、たのに！

「おはよう。良く眠れた？」

死神……いや、この際もうアイツはもう黒熊だ。熊にぽいつと人権を無視して大広間に放り込まれたイオリの瞳に映ったのは、極上の微笑みを湛えて優雅に座る《魔王》だった。

長いテーブルには沢山の椅子と磨かれた銀食器。

なるほど、どうやら食事を行う食堂と大広間を兼ねているらしい。テーブルに軽く両肘を着いて、手の甲に顎を軽く乗せた体勢で、リヴェンツェルは全く気にした様子も無く、爽やか且つ当然のようにイオリへ挨拶をして、軽く首を傾けた。

だが、この笑顔に騙されてはいけない。ついつい、自分も笑ってふっかふかのベッドとふわふわの枕が気持ちよくてぐっすり眠れました何て言っではいけない！

思わず目尻をキツくして、イオリは《魔王》を睨み付けたが、視線が重なった瞬間に余計嬉しそうに微笑む端正な顔に限界が近付き、早々に視線を外した。

茹蛸宜しく顔が熱くなる。昨日のことが脳裏に浮かんだとか、絶
対ない。

ちちちちち、ちがう、違ったら違っ！

武器である細剣レイピアをしっかりと胸の前で抱き持ち、なけなしの冷静さを必死に掻き集めて、睨むイオリを面白そうにリヴェンツェルは眺めていた。

「こっちにおいで。朝食が未だだろう？食べながら説明しよう」

「誰が　！」

敵の用意した食事なんて、とは言えなかった。

聞き間違いにするには大きすぎる元気な音が、イオリの腹部から響き渡ったのだ。

どんな時も正確な腹時計っぷりにとりあえず、一回死にたい。恥ずかしすぎる。

笑みを深める彼に、余計首を吊りたくなってきました。穴を掘って潜りたい。

いや、寧ろいつそ豪胆な自分を褒めるべきですか。でもちよつとこの場に居るのはいたたまれないし精神衛生上宜しくないなので早々に退出させて頂きますそうです。

体操選手も真っ青な程素早くクルリと背を向けて、此処から逃げ出そうとしたイオリの視線は扉ではなくて、真っ黒な壁だけが映っていた。……壁なんてあつたっけ。

「おせー」

ひよいと。視界が唐突に浮いた。
持ち上げられるまで一杯一杯で気付かなかったが、そういえばイオリの背後には、”六柱”の一人が居たのだった。このやるー！また猫みたいに持って！

フーツと威嚇の声を上げるイオリを、少しだけ面白そうに金色の瞳が見るものの、目的を達成する迄この死神熊は、持ち上げた手を離す気等無いらしい。《魔王》の元へ、イオリの五歩分くらいをのつしのつしと軽々一歩で進んで行く。

あ、床が悲鳴上げてる気がする。いやいやこれは自分の心の悲鳴かも。

「王」

相変わらずの端的言葉と共に、ペイツと下ろされたのは《魔王》の膝上でした。

あ、意識飛びそう。せめて隣の椅子に下ろしてくれたって罰はあたらなと思うんです。

とにかく冷静に、落ち着け自分！

「少し、目が腫れてるね……後で、冷やすものを持って来させよう」
吐息が睫毛に触れたと思ったら、温かな感触が瞼に触れました。その、唇が。ゆっくりと、目頭から目尻に向かって、触れて。甘い熱を孕んで、睦言のように、低い声が囁いて。

冷静？落ち着き？なにそれおいしいの？

「り、りりりりーヴっ！」

駄目だ。自分の声帯とか舌がちゃんと仕事してくれない。ついでに見事に裏返ってる。奇声じゃないかこれじゃ。

「なに？」

何じゃない！ちちち、近い、顔が近い！

こんなにスキンシップの激しい人だっただろうか。

向けられている笑顔は今迄と変わらないのに、何というか、凄絶な色気が放出されているというか何とか、ちよつと目を放した瞬間に喰われそうな貞操の危機を感じるのは気のせいでしょうか。

> 性格だつて爽やかで、紳士で？

激しく間違いでした。

ちよつとでも視線を逸らしたら身の危険という強迫観念に駆られ、今すぐにでも膝の上から飛び降りて壁際へ逃げ出したくても逃げられないイオリが、長い沈黙に耐えかねて気絶でもしたほうが…と真剣に考え出した頃、危機的状况を救ったのは「ぶふっ」という笑い声だった。

「王よ、そろそろ放してあげないと、貴方のお姫様は気絶しそうですよ」

「！」

救世主現る！

自分が《勇者》だという事はこの際全力スルーだ。隣でチツとか小さく舌打ちみたいなのが聞こえた気もするが、聞こえない。何も

聞こえない。

兎にも角にも、渋々といった感じではあるが、イオリの身体が《魔王》の膝上から隣の椅子へ降ろされると、イオリは安堵に大きく息を吐き出した。

その尻硬直する。やべえええええ！忘れてた！

「可愛らしい《勇者》ですねえ」

「オイオイ、こんなのが本当に昨日アレをしたのか？」

「やーん！髪サラサラ！結んであげたーい！」

そうだった、余りに衝撃的且つ《魔王》の存在感が強過ぎて今の今までさっぱり忘れていたが、此処は魔王城。そして、”六柱”が集っているんだった！

自分以外は全て魔族、即ち敵である。のだけれども。

「イオ、葡萄^{ぶどう}食べる？」

「たべる！」

しまった！大好物につられた！

流石二年間行動を共にした相手である。

敵ながらあっぱれ！とは思わないぞ、決して。葡萄を食べながらでも、負けたとは思ってません認めません。一時休戦です。

それにしても、此処は本当に魔王城なんですか。

昨日、乗り込む前の決意は何処へやら、イオリは差し出される葡萄を頬張りつつも脱力感に包まれるのを否めなかった。ちなみに、葡萄は地球と同じ葡萄です。ただ、巨峰サイズの葡萄4〜5粒を一粒にしちやいました的にビッグサイズ。食べ応え十分。

てか、あれ、”六柱”ってこんな人（？）達だったのか緩過ぎる。

死神ことアンデルベリは黙然と座って食事しているだけだし、あとの四人はイオリが引く程フレンドリー。むしろちよつと静かにしてください余計混乱します。

彼はもうちよつと離れてくれて良いくらい距離がががが！近い！

……いや、殺気を消そうともせずに睨みつけている人物が一人。

「さてと、それじゃ何から話そうか」

知ってか知らずかシカトしてか、魔族を束ねる悪の権化（と、教えられた）《魔王》の称号を持つ彼はイオリから視線を逸らさない俣、ニッコリと笑った。

嵐のヨカン。主に私が。

その三歩（後書き）

次話ようやく六柱の紹介にいけそうです。

お気に召していただけましたら、評価感想等宜しくお願い致します。

その四歩（前書き）

気付けば日間ランクインしておりました、ありがとうございます！

その四歩

「それじゃ、まずは自己紹介から」

いいのかそれで!?

というツツコミは、イオリの心の中だけで空しく反響した。

ただただだだつて誰かさんの顔が近いんだつて!それどころじゃないんだつて!

「此処に居る六人は俺のげぼ……部下で、”六柱”と呼ばれてる」

さて、今何て言おうとしましたかリーヴさん。

下僕と聞こえたのは気のせいですか?そうですか。

「イオリを迎えに行かせたのが、”死神”アンデルベリ。寡黙だけど、腕は確かだよ」

「王……小さい」

「ああ、イオ?お前からしたら、全員小さいと思うよ。アンデルベリ」

先程から黙々と食事をしていた熊……いやいや死神は、チラリと金色の瞳をイオリへと向けて目礼のような仕草をすると、これまた単語だけの言葉を轟く重低音に乗せた。年齢は若くも見えるし、一番古将にも見える。年齢不詳がぴったりだ。

イオリには意味がさっぱり分からなかったが、あっさり《魔王》は理解したらしい。今の単語だけでどうやったたら文章になるのか甚

だ疑問だ、謎だ。思念のようなものが繋がっているとしか思えない。

「六柱”唯一の女性、” 氷雪の魔女” ミルカ。 女性同士、仲良くしてあげて」

「勿論です、王！こんなに可愛らしい《勇者》だなんて。 後で私の部屋で着替えましょう！」

先程イオリの髪をどうのこうのと言っていた女性だ。

氷から職人が削り出したように、透明な青の髪に真っ青な瞳。そして、際どいドレスから零れ落ちんばかりに見える豊満な肉体。イオリよりも年齢はちょっと上くらいに見える。

同性のイオリが見ても、ちょっと恥ずかしくなってしまうくらいに綺麗で、身体だってその…う、羨ましくなんて…ないったらない！

「智将” オルトウース。 彼は知識が豊富だから、何でも質問すると良いよ」

「ご謙遜を、王。 貴方様の知識に比べれば私等 イオリ様、宜しく願います」

紫の髪を背中くらいまで伸ばして、一つに結んでいる。

年齢的には22〜23くらいだろうか。落ち着いた大人の人のという感じだ。

ニコニコと笑っているせいか、元々なのか、狐目で瞳の色は分からないが、その笑顔は裏が分からない。成程、智将と言われるだけある。

ちよつとまで、今”イオリ様”って言われたような。

「雷獣” エスト。 あんまり近付きすぎないほうがいいよ」

「ひっでえ、王！これでも最近はちゃんと調整できるように あ

”！？”

「髪一筋でも傷付けたら殺す」

金よりも、もっと鮮烈な、太陽のような色の短髪と緑の瞳の少年で15歳くらいに見える。

悪ガキがちよっと成長したらこんな感じ、という典型的な性格のようだが……なるほど、雷獣というのは本当らしい。エストがいきり立った途端に、エストの前に置かれていた陶器の食器が全て迸った雷で破砕された。

イオリはぎよつとして、身体で抱え込む細剣をレイピア尚もしつかりと抱き締めたが、誰も動じないあたり、どうやら日常茶飯事らしい。傍迷惑な食事中の日常茶飯事である。

というかサラリと恐ろしい事を言う隣の人が、一番恐ろしいんですが。

「形無し」のアンクノウン。 うーん。 好きな姿になってもら

ったら良いんじゃない？犬とか」

「……がっ、がい……こつ……！？」

正直この人（人なのか？）が、一番衝撃的だった。

まあ、言ってしまうえば骸骨。ただし、骨は墨を被ったように真っ黒。

眼窩に鈍い光が瞬いているが、これが目の代わりなのだろうか。というか、先程までこんな骸骨さんは広間に居なかった。絶対に居たら気付くって。それにしても、何時の間に？

しかも、カタカタと不気味に顎を鳴らすと、真っ黒な骸骨さんは忽ちぐにゃんと形を崩して、どういった経緯なのかもふもふの子犬に形を変えた。

なにこれ手品？いやでも、かわいい！かわいい！

ぱたぱたと尻尾を振って、イオリの足元に近付いて来る子犬が可愛らし過ぎる。

さっきの骸骨さんverは忘れ去ろう。ずっとこのままの姿で居てください。

隣から漂ってくる気配が不機嫌になるのも気付かずに、アンクノウンを抱き締めてもふもふを堪能していたイオリへ、激しい言葉が叩きつけられたのはその時だった。

「……王よ！俺は認めない！」

「ヒュール」

全員の視線が一人へ集中する。

怒りを湛えた瞳は紅蓮、髪も、炎のような紅。怒気に従い空気がチリリ、と熱を持つ。

炎 ”炎帝”か。先程から隠そうともせず、イオリに殺気を向けていた人物である。

咎めるような眼差しを送る”六柱”達とは逆に、イオリは何処か安堵を覚えていた。

そう、本来なら、こういう関係なのだ。自分と魔族は。

《魔王》を倒しに来た《勇者》がイオリ。

忠臣と言われる”六柱”がフレンドリーなのは可笑しいのだ。

「こんなちんちくりんが、歴代最強と言われる《魔王》の伴侶だと言っのか！」

「ヒュール。その、王が選んだ御方だ」

「チッ！」

強く舌打ちをすると、炎帝は勢い良く椅子から立ち上がり足音強く広間から出て行った。

それを見送る皆は、どうやら気性が炎のように荒い彼の事を分かっているらしく、苦笑するだけだったのだけど。

……………。

……………。

ん？んん？

なにか、おかしいぞ。

この際ちんちくりんと言われた事に関しては、寛大な目で目を瞑ろう。

だけど怒る場所が間違っではいませんか？というか伴侶？なんだっけそれ。

「はん、りよって……………」

「え？だから伴侶。んー、俺のお嫁さん？」

サラッと如何にも当たり前のように言われて、イオリの頭は思考を放棄した。

お嫁さんってアレよ、嬉し恥ずかし交際期間を経て、両親に挨拶

してそこでお父さんがちょっと泣いちゃったりして私も涙ぐんだりして……で、白いウエディングドレスを着て、お父さんとお母さんの娘で幸せでしたとか言って号泣したり。友達から冷やかされて照れて新婚旅行に行ってみたりして。

……そんなのを挟んだ後じゃないっけ、その単語。

「およ……およめさんんんんん!?」

「昨日俺ちゃんと言ったよ。結婚しようって」

聞いた。確かに聞いた。そこは認めよう。

だけど「はい」なんて絶対に言っていない!

何よりあのタイミングで何で結婚に繋がる訳!? サラツと言える事なのかっ!

危うく、腕の中の黒い子犬さんを絞め殺すところだった。

ぺちゃんこになってしまった毛を逆立ててふわふわさせ直しながら、イオリは慌てて隣の《魔王》を見上げた。

自分の人生設計がめちゃくちゃにされそうな気がする。誤解は全力で阻止せねば!

「ちょっと待って! 私、リーヴと結婚なんてしない! 大体、私は《勇者》でリーヴは《魔王》なんでしょう? それなのにそんな冗談を……」

どうして、とは言えなかった。

ふ、とイオリに影が落ちた刹那。イオリの口端の際どいところに、リーヴェンツェルの唇が触れた。混乱も相俟って真っ白になるイオリを他所に、微かなリップ音を残して、《魔王》は《勇者》の耳元で低く、囁いた。

「……冗談じゃないよ、イオ。俺は本気。ねえ、言葉で言っ
て分かって貰えないならイオの身体に、分からせようか？」

「あおえふあ…えひふ@えひうふじこりょ!？」

クスリ、と小さく笑う声も艶めいていて。

耳元で言葉が囁く度に漏れる吐息が熱くて、自分とリーヴのどち
らが熱いのか分からなくなる。視界が回る、思考も回る。

混乱の境地に陥っていたイオリの意識がふと、戻ったのは。

包帯に包まれた片手。

昨日、イオリが向けた焰の刃を素手で握った為、爛れた《魔王》
の片手だった。

その四歩（後書き）

お気に召していただけましたら、評価感想など宜しくお願いします
^ ^

その五歩（前書き）

今話は少しシリアス気味です、ギャグに期待されていた方はごめんなさい…！

その五歩

焔に焼かれて肉の焼ける独特な匂いが、まだ鼻腔に残っている。包帯からは、消毒薬の匂い。夢じゃない。

……夢じゃない。

私は、ずっと騙されていた？

こんなに夢であって欲しい、と思ったのは、この世界に召喚された頃以来かもしれない。

彼と、リヴェンツェルと出会って、打ち解けるまで……ずっと、私にとってこの世界は、恐怖以外の何物でもなかったのだから。

「……どうして？」

どうして、騙したの？

どうして、殺さなかったの？

どうして、好きなんていうの？

どうして、……あなたはまだ、笑ってくれるの。

沢山のどうして、が胸の中で渦巻いて苦しい。

昨日イオリが傷付けた彼の手に触れようと伸ばした手を、恐れるようにして強張らせると、イオリは深く俯いた。

二年も一緒に、ずっと一緒に居たのに、彼が分からない。

「イオリ」

少しだけリヴェンツェルはイオリから身体を離すと、恐れたように触れる事を止めてしまったイオリの手へ自分から手を重ねた。

びくり、と身体を揺らすイオリに構わず石榴石色の瞳が真摯に《勇者》へ注がれた。

「確かに俺はイオリを騙してた。でも、”真人類帝国”の領域で言う訳にはいかなかったんだ。イオリは、狙われてたから」
「……え？狙われ……？」

狙われている？

確かにイオリは《勇者》として行動する以上、旅の合間には何度も魔物の奇襲を受ける事も多かった。だが、それにしても狙われるという程の事でもないし、今一ピンとこない。

「イオリ。君が召喚された理由は何？」

「ま、《魔王》を倒す為」

「それは、何故？」

「《魔王》が世界を壊そうとしてて……」

「うん。そう教えられたんだらうけど、そこから間違ってるんだよね」

なんですと？イオリは思わず重なっている手から、リヴェンツェルへと視線を持ち上げた。

石榴石色の瞳に嘘を感じられず、益々混乱する。

召喚された時から、認識が間違っているというのだろうか。
混乱を拭いきれぬ俛、イオリはその時の事を思い起こした。

イオリがこの《ガイアス》と呼ばれる世界に召喚されたのは、二年前。

学校帰りに、友達とゲーセンで遊んだ帰り道。角を曲がった瞬間に眩い光に包まれた。

激しい耳鳴りと、眩しさに眩暈がする中で、漸く目を開けたイオリの目に飛び込んできたのは、足元に描かれた巨大な魔法陣と、沢山の真つ白な服を着た神官達。

そして、狂喜乱舞する一人の男だった。

訳も分からない俣目を白黒させるイオリを他所に、真つ赤で派手なマントとちよつと悪趣味な宝石に身を包んだ男は自分が”真人類帝国”の皇帝であると明かして、イオリに告げた。

「この国は今、《魔王》からの侵攻を受けて危機に瀕している。民は怯え、魔物がはこびり、このままではこの世界は滅びてしまうだろう。我々では最早手に負えぬのだ……異界からの《勇者》よ、どうかその類稀なる力でこの世界を救ってくれないだろうか」

だろうか？なんて言っておいて、拒否権なんてなくて。

だって、自分の状況だって上手く理解できていないのに、目の前には魔王軍に襲われたという民が何十人も集められ、切々と涙ながらに自分達の境遇だとか、これからの暮らしだとか、イオリが《魔王》を倒した後の平和だとか、そういつた事を何時間も訴えられたのだ。

しかも、《魔王》を倒してくれた暁には、イオリが地球 日本へ戻れるように準備を進めておく、とまで言われたなら、疲労困憊

していたイオリは縋るように頷くしか無かった。

お決まりのチートで、知らない言葉を話したり書けたりしても、呪文なんて唱えずイメージだけで魔法を使えても、握ったこともない剣を師範代も真つ青なくらい使いこなせても、精霊とか神様とか、そんなのから愛し子と言われて祝福とか貰っても。

イオリは、自分で日本に戻る方法を知らないのだから。

城に居たのはたったの数日だった。

リヴェンツェルと顔合わせをした翌日には、まるで早く行けと追い出されるように、城の裏門からイオリはひっそりと旅立った。

この世界の事を何一つ知らずに戸惑うイオリへ、リヴェンツェルは世界を教え、一緒に学びながら国を知る為に旅をして。時には魔物の討伐をしたりして。

「綺麗だね、この世界は」

あの一言が、唯一イオリと行動を共にしてくれている人の言葉が決め手。

国のためじゃない。あの王のためじゃない。

友人で、兄で、パートナーのこの人が好きだという世界を、守りたい。

だから。

「だいたいさあ、先に手を出してきたのは人間だぜー？」

エストの憤慨したような声に、イオリはハツと我に返った。

先程食器を破壊した”雷獣”は、どうも虫の居所が悪いらしく、腕を組んで不機嫌そうに眉を寄せると、忽ちエストの周囲にパチパチとした雷光が閃く。

「……今まで何もなかったのに、急に魔王軍が帝国に攻めてきて……自分達には、どうしようもないって……」

「はあ？魔族ってのは、自分よりも弱いヤツを力でねじ伏せたりはしねーんだぜ。弱いヤツ苛めて何が楽しいんだよ？」

フンツと鼻息荒いエストに、啞然とするしかない。

イオリの様子を見兼ねて、オルトウースが控え目な咳をすると、エストの言葉を続けた。

「イオリ様は何か誤解をしていらっしやるようですが……先に戦を仕掛けたのは帝国なのです。先代の皇帝は賢君で知られており、長い間に渡って友好関係が続いていましたが……今代になってからあの有様で。”魔国”の肥沃な大地を求め、欲にかられたのでし
よう」

「さすがに、戦争を仕掛けられてニコニコしてられる程、私達だ
って優しくはないの。売られた喧嘩くらい、買うのよ」

ちよつとだけ言いにくそうに、それでもきつぱりと言い切るミルカへ向けた視線を先程から抱きしめているもふもふの黒い子犬、もとい、アंकクウンへと落とすと、イオリは強く目を閉じた。

この世界の事を知らないイオりに、嘘を吹き込んで、体の良い駒とか手先とか、そういったものにあの皇帝はしたのだ。あわよくば、愚かな《勇者》が《魔王》を倒してくれると。

「禁忌」にまで手を染めて、どんな異界人を喚んだのかと最初は興味本位で近付いた。だけど、イオを初めて見た時　あのタヌキジイから、イオを奪ってやろうと、思った」

「……え？」

愕然として、そして言い知れない苦しみが溢れ出るのを抑えて居たイオりは、隣から聞こえてきたリヴェンツェルの声に、隣へ顔を向けた。

空色の瞳に映ったのは、宝石のように綺麗な赤。

ただ、穏やかな色ではなくて、何処か奥のほうで揺らめく炎は……怒り、だろうか。

「でも、あのタヌキも結構巧妙だね。《勇者》が真実に気付く素振りを見せたら直ぐに殺せと……^{スパイ}間者が沢山帝国内には居たんだ。

イオが負けるなんてことはないと思うけど、ジジイの息が掛かっているヤツがイオに近付くだけでも不快だからね……イオは何も知らないまま、”魔国”の領域へ入る必要があった」

「……過保護」

「煩いよ、アンデルベリ。用意周到って言うてくれるかな」

黙然とやりとりを見ていたアンデルベリの、単語ながらも的確なツッコミに《魔王》は微笑を湛えて、けれど何処か抑揚のない声を上げた。

「大体、自分達の尻拭いが出来なくなつたから、異界から呼び出してまで片付けさせようなんて　イオは、元の世界に戻れないのに」

「…………え？」

情けないほどに自分の声が震えている。

皇帝の言葉が全て嘘だったというのなら、あの時の約束も嘘かもしれない……そう、思っただけでも、見ないように蓋をして目を逸らしていた事が、心の準備もない忒急に現実へ叩きつけられるのは恐ろしい。

イオリは肩を揺らして、隣の《魔王》を泣き出しそうな顔で見上げた。

切なげに、悲しげに、《魔王》の瞳が揺れる。

おねがいだから、いわないで。

そう言いたいのに、唇にチャックをされたように、口が開かない。

「…………異世界の者を召喚するのは、最大の”禁忌”であり、邪の行い。そしてこの魔法は、一方通行…………誰も、イオを元の世界には戻せない」

方法が無いんだ。

囁くように、それでもはっきりと告げる《魔王》を丸々と見開いた空色の、イオリの目が凝視して。

ぼろり。

大粒の涙が、零れ落ちた。

ああ、泣かないって、決めたのに。

昨日から私の決意は崩壊しっぱなしだ。まったくもう。

その六歩

驚いたように見開かれる柘榴石色の瞳を、直視できない。

泣いたってどうにもならない事くらい、イオリだって分かってはいるのだ。

分かっただけでも、胸が苦しくて、込み上げる気持ちに涙を生み出し、次々にイオリの頬を伝い手元へ落ちてゆく。

「イオリ」

「いつ、いたたたた、目にゴミが入って滅茶苦茶痛い！ちよつと洗ってくる！」

今は、リヴェンツェルの慰めも聞きたくは無かった。

だからイオリは空々しい嘘を早口に並べ立てると、子犬姿のアンクウンを床へと降ろして誰の顔も見ないように深く俯いて、逃げるように広間から廊下へと出た。

そのまま道も分からない俣に勢い良く駆け出した。警備にあたるているらしい数人から、驚いたような声を掛けられたが、知った事では無いのだ。

「アンクウン、イオリを」

静かながらに、触れれば切れるような鋭利さを宿した声の子犬へ

と注がれると、”形無し”と呼ばれる”六柱”は子犬の姿のまま、音も無くフツと掻き消えた。

「……腹立だしいね」

一見しては、声質声色共に先程と全く変わらない。ゆったりとした仕草でリヴェンツェルは足を組み、話し方も明日の天気の話するような気軽さだ。

だが、広間に集う”六柱”の残り四人と、警備兵達は皆一様に表情を強張らせた。

其処に居るのは紛れもなく《魔王》。
全ての魔を統べる者。

彼に出会ったら、深く頭を垂れよ。

彼の目を見ることなかれ。名を呼ぶことなかれ。

彼の逆鱗に触れてはならぬ。

もしも、それを破ったなら。

「人間は脆いから、必要ないと思っていたけど　　いっその事、帝国の人間全て殺して、滅ぼしてしまおうかな」

《魔王》は《勇者》が昨日傷を付けた片手へ、包帯の上から愛お

しげに唇を触れさせて。
酷く、美しく、酷く、艶やかに微笑んだ。

「……迷った……」

イオリは、周囲の景色をぐるりと眺めた後に、深く溜息を吐き出した。

迷った。完全に迷った。

大体、一度もイオリは外に出た記憶が無いというのに、目の前に広がる庭園は一体何なのだろう。いや、決して迷子スキルなどという傍迷惑なものが自分にあるとは認めない。

そもそもこの城が悪いのだ！真っ直ぐ歩いているつもりなのに、何時の間にか道はクネクネと曲がったり上がったりするし、上に行っているつもりが気が付くと階段を下りている始末。

恐らくは侵入者除けの為だとは思いますが、如何せん城の内部を知らないイオリには致命的であった。

「まあいつか……あそこに居るよりは、落ち着くし」

美しく刈り込まれた芝生に、薔薇の生垣。

瑞々しく咲き誇る花々はイオリの知っているものもあるし、この世界で初めて見たものもあるが、どれも季節を問わずに美しい花弁を広げている。一体どういう育て方をしたらこうなるのだろうか？

うむ、謎だ。

少し息を吸い込むだけで、緑に溢れた香りが荒んだ心を少し落ち着かせてくれる。

もしかすると、誰かが自分を探しに来るかもしれない。だが、連れ戻されても、どんな顔をして皆と会えば良いのかイオリには分からず、自然と隠れるようにして薔薇の生垣が作る奥へと足を進めた。

薔薇の生垣が作る奥には、白亜の噴水が滾々（こんこん）と清流を生み出していた。

周囲の緑と、白と赤が入り混じって咲く薔薇に水。幻想的な光景に、思わずイオリは感嘆の溜息を吐き出してうっとり景色を眺めて居たが、思わぬ先客の姿に目を丸くした。

「……あ！」

「お前……なっ、お前その顔！」

緑に映える、紅蓮の髪。”六柱”の一人、”炎帝”ヒュール。

噴水の縁に座って軽く目を瞑っていたヒュールが、イオリの声で鬱陶しそうな視線を寄越した後、ぎょっとしたように目を見開いた。

はて？あなたにちんちくりんと呼ばれた顔ですが、何か？

何やかんやで根に持っています。最早やけくそ気味にイオリは笑顔を作ると、噴水の縁に座るヒュールへ近付いていく。

それにしても。先程広間で対峙した時は、随分攻撃的な印象だったのだが……こうやって見ている限り、何やら酷く狼狽しているからなのか、どうにも気が削がれてしまう。

「ちんちくりんとは言ったが、……泣いてるのか」

「……喧嘩売ってるのか、心配するのかわどっちかにして欲しいんで

すけど」

視線が剣呑なものになる。その俣言い争いになるかと思っただが、意外や意外、紅色の瞳が戸惑ったように揺らぐとソワソワと落ち着き無く彷徨い始めた。

うつむ、何やらおかしい。

本当にこのヒュールは、先程広間で啖呵を切ったヒュールと同一人物なのであるうか。

「いや……その、俺が……泣かせたのか」

「はい？……ああ、なるほどー」

態度が妙におかしいと思っていたが、どうやらイオリが泣いていた理由を、「ちんちくりん」発言に傷付いてだと誤解しているらしい。

何だ、結構に良い人ではないか。いわゆるツンデレという部類？ オタクだった友人が見たら、狂喜乱舞しそうである。

ヒュールから半身程離れた場所に腰掛けると、赤くなった目元を隠すように何度か強く擦り、イオリは気恥ずかしさを隠すようにして、はにかんで見せた。

「違うよ……何というか、元の世界に戻れないなんて今更気付くとか……自分の馬鹿さっぷりに情けなくなったというか……うん、本当に馬鹿だよなーって」

あ、まずい。思い出すと目頭がじんわりと熱くなってくる。

本当は、かなり前から薄々ではあるが、感付いていたのだ。だけど、自分がそれを認めてしまうと、日本との繋がりや思い出が全部嘘になってしまう気がして 見ないフリをして、目を背けて、耳

を塞いでいた。

それがリヴェンツェルの言葉で急速に現実味を帯びて、イオリの中で目を逸らせない程に大きくなってしまった。最早認めざるを得ない。

二年も此方で過ごしている為か、不思議と怒りはない。

ただ、自分の両親と友人に二度と会えなくて。

日本に戻れない　それが、悲しい。

噴水の縁に器用に体育座りの要領で膝を抱え、膝頭に顎を乗せてイオリは緩く溜息を吐き出した。皆の前であんな態度を取って、今更ながらに恥ずかしいぞ、私。

「……二度と、戻れぬを認めるは苦痛だ。　それがお前の望んだ結果でないのなら、尚更」

ぼふり、と頭に落ちる重みと低い声に頭を撫でられているとイオリが気付いたのは、随分経ってからだった。わしわしとイオリの髪を掻き乱す手はちよつと乱暴だが、今はその手が何だか心地良い。

隣へ視線を向けたら、フィツと視線を逸らされた。あ、でも耳が赤い。照れてる。

「泣くな。　お前が泣くと王が悲しむ」

「何ですかそれ……」

最初は最悪な感じだったが、良い人だ。

不器用だけど、優しい。思わずイオリは小さく声に出して笑った。紅の瞳が少しだけ柔らかく細められる。うん、そうしていると貴方も格好良いぞ。

「そつだ、笑っている方が良い。不本意だが、お前は王に”真名^{まな}”を与えられた存在だからな」

.....。

.....？

「まな？」

なんじゃそりゃ。

「知らずに呼んでいたのか。」

ある意味強者^{じやうもの}だな」

わ、悪かったですね！

その六歩（後書き）

ヒュールさんは案外良い人w

その七歩

「良いか、”真名^{まな}”ってのは……」

イオリが”真名”というものを知らないと知った途端に、ヒュールは懇々（こんこん）と説明する姿勢を取った。ちつ、知ってるフリすれば良かったとは、殊勝なので言わない事にする。何やかんやで、この”六柱”は目つきが恐ろしく怖いのだ。

「俺達魔族の魂に刻まれた名、それが”真名”。自らの意思で誰かに”真名”を告げる事は、自分の命を相手に捧げた行為と等しい……《勇者》、お前が先程から呼んでいる王の名こそ、”真名”だ」「……へ！？命って……り、リーヴの？」

話半分のつもりであったが、予想の斜め上をいく話にイオリは瞠目した。

命。命と言ったか、この人は。リヴェンツェル。そんなにも大切な名前だったのだろうか？いやいやいや、初めて会った時フツに名乗っていたよね確か。

それとも、イオリが知らないところで何か重要なことをしていたのかもしれない。

…あ、ありうる。まじか！？まじかもしれない！

最初にリヴェンツェルと出会った時は、最高最低に鬱状態だった時じゃないか！

ろくに話も聞かない俣、名前だけ記憶に残っていても、二年前の自分なら可笑しくない。

サーツと頭の血が下がる思いで顔を青褪めさせるイオリに、ヒュ

ールは訝し気な視線を寄越すと軽く眉を顰めた。

「勿論俺の名も通り名であって、”真名”ではない……何を一人で百面相している」

「イエツ！いい、いい命でございませうか」

「ああ。お前が王の名を呼び、死ねと言えは……王は躊躇い無く自ら死ぬ。それほどに、”真名”は我等魔族にとって重要なものだ」

絶句。それにつきる。

つまり、お命頂戴！とわざわざ魔王城にまで来なくても、イオリは最初から《魔王》の命を握っていたという事か。

なぜ？心が揺れる。戸惑いに、視線が泳ぐ。

そこでイオリは一つの事に思い至り、ハタと動きを停止させた。ダラダラと冷や汗が背中を伝う嫌な感触を不快に思いながら、ぎこちなくヒュールを見上げる。

”リヴェンツェル”は《魔王》の”真名”だという。

そして、真名は魂に繋がるもので、その名を呼ぶだけで思いの俣？ちよつと待て、私はそんな大事な名前を、堂々と皆の前で言っていないませんでしたか。

「私……普通に皆の前で……言っちゃった、言っちゃったけど！？どっ、どっしよう！」

幾ら”真名”というものを知らなかったとしても。

もしも、《魔王》を良く思わない者がイオリの声を聞いていたら。

もしも 害しようとして、思っていたら？

”真名”を呼んで、一言……死ねと、言ったら？

そんなの嫌だ！

激しく動揺して顔色を無くした拳句、泣きそうにベソをかくイオリを紅蓮の瞳が見詰めると、フツと少しだけ柔らかく細められた。そのまま、先程よりもちよつと強く頭を撫でられる。い、痛い。

「心配するな。 ”真名”は自らの意思で告げた相手に捧げ、またその相手が ”真名” を受諾し受け取らねば効果は無い。 つまり、俺達は王の ”真名” を知ってはいるが、口に出す事は出来ない……まあ、王程の力を持つ者の ”真名” を受け取れる者が居るのも驚きだが」

……話の半分も理解出来なかったが、一先ず問題は無いという事で間違いはなさそうだ。

「よ、良かったあ……」

思わず全身の力を抜いて、ほつとする。

それにしても、 ”真名” を受け取るとは何だろうか？

紙に名前を書いたりしたものを、受け取ったりした覚えは無いし、あの時何か特別な事があったかと言われても否としか答えようがない。

イオリの記憶に残っているのは、絶望と憎悪の心底でこの世界を睨んでいたイオりに、微笑んでくれたあの柘榴石色ガーネットの優しい光だけ。

「アंकノウン」

うーむ。顎に手を当てて考え込んでいたイオリの思考を引き戻したのは、意外そうな響きを含めたヒュールの声だった。

紅蓮の瞳が向く方向へイオリも視線を向けると、先程イオリがこの場所へ入ってきた生垣の入り口に、ちんまりとした黒い子犬の姿はたはたはたと左右に揺れる小さな尻尾が何とも言えずかわええ！

「くろちゃん！」

「く……なんだそれは」

「え。リーヴもそうだけど、この世界の人って名前が難しいんだよね……だから、くろちゃん！もっふもふだし、かわいいでしょ」

音もなく此方へ近付いて来ると、足元でお座りして見上げてくる姿が惱殺過ぎる。

犬とか猫とか小動物とか大好きです、撫で練り回して愛でたい。

脱力気味なヒュールへ上機嫌な言葉を返すと、イオリはアंकノウンを抱き上げふわふわの毛に顔を埋めた。

ああ、至福……。この子が”六柱”の一角を担う存在であり、元は骸骨さんだったのは忘却の彼方に捨てて埋めて置こう。よし、そうしよう。

ほんのりと肌を感じる子犬の体温が温かい。

イオリの家でも、犬を飼っていた。

お父さんがボーナス出たからって、奮発して買ってきてくれた。

毎日の散歩がイオリの日課で……。

だめだ、深く考えると心が泥沼に沈んでしまう。

子犬を抱く手に少しだけ力を入れると、イオリは重い息を吐き出した。

そのまま暗い気持ちを払拭させるように、ヒュールへ笑顔を向けた。

「あの、ヒュール……さん」

「さんはいらん」

「じゃあヒュール。なんでリーヴは私を殺さなかったのかな？何も知らない《勇者》のすぐ傍に居て、やろうと思えばなんでもやれたのに……それに、私魔獣とか、沢山狩ってるのに」

そうなのだ。そこが一番不思議なところなのだ。

ずっとそのことがイオリの中で、何故・どうしてと渦巻いている。この世界の事を全く知らず、どうすれば良いかも分からなかったイオリなら、例えチート能力を持っていても簡単に殺してしまう事が出来たはずなのに。

「さあな、俺は王では無いから王の心情を推し量る事はできない。

それと、一つ勘違いしているようだが、魔獣は魔族とは似て非なるものだ」

「そうだよねえ……って、え！？違うの!？」

「当たり前だ、あんな知能もろくに無い獣と一緒にするな。魔獣^{アレ}

はより強い力を求めて道を踏み外した者の成れの果て。繁殖力が強い上に貪欲で、誰でも襲うから人間達だけで無く魔族も手を焼いている」

し、知らなかった。

帝国で魔獣を討伐していた時、人々は魔獣と魔族を同一として捉えていたから、つきりイオリもそうだと思っていたのだが。どうやら全く違っらしい。

そういえばイオリはヒュールのような人の姿をした魔族と戦った事がない。中にはヒヤリとした事もあったが、魔獣ばかりだ。

帝国の人々からはそれでもかなり感謝されたから、別段疑問にも思わなかったが……もしかすると、いや、もしかしなくても《勇者》の傍で常に手助けをしていた《魔王》の存在が大きかったのかもしれない。

知らない事が多すぎて、知らない間に守られてばかり。

それなのに、何故自分ばかりと悲観して　ああ、小さな子供のようだ。

悲劇のお姫様に浸って、悦に入っていたも同然じゃないか。

難しい顔で黙り込んだイオリをそつと横から眺めて居たヒュールと子犬、もといアंकノウンであったが、次の瞬間同時にハツと身体を強張らせた。

「……？　どうしたの？」

「不味い！　王が”封冠符”を外した」

「ふうかんふ？」

聞き慣れない単語である。幾らこの世界の言葉が分かる不思議チート能力があつても、イオリの記憶と繋がらない単語は謎言葉として受け取られる。

不思議そうに首を傾げるイオリとは異なり、並々ならぬ緊張感に目尻を険しくしたヒュールは少し早口に説明した。

「王がピアスやネックレス、指輪をしているだろう。アレは全て”封冠符”というもので、強大すぎる王の力を抑えている道具だ」

確かに、リヴェンツェルは左右の耳や首、手首や指先に華美では無いが沢山のアクセサリーを着けていた。結構な頻度で形や色が変わっていた為、随分なおしゃれさんだとは思っていたが。

「通常、アレを一つ身に付けるだけで俺達”六柱”とて唯の人間になる。魔法等使えない」

「……はい？」

軽く頬が引き攣っている自覚があるが、今はそれどころではない。ちよーつとまで。見える場所だけでも、5・6箇所くらいにアクセサリーがあったような気がしますけれども！

「というかアクセサリーを着けた状態で、普通にあの魔法使ってた……気が。」

「アंकノウンからの思念で報告は受けていたが……まさか、本当に帝国を滅ぼす気なのか……？」

「滅ぼす！？な、なんで！」

全く以って意味が分からない。

今まで《魔王》じゃなくてリヴェンツェルとして、彼はイオリの傍に居てくれたのに。

イオリが彼の事を《魔王》だと知ってしまったから？

帝国は嫌い。利用する為だけに、私を喚んだから。

皇帝も嫌い。嘘という甘言だけを言っつて、自分は動こうとしないから。

でも、帝国を滅ぼすのは？

あの場所に暮らしている人達は何も知らないのだ。

イオリが異界の人間である事も、何も。

ただ、毎日の暮らしを脅かす魔獣の存在に震えて、皇帝が起した戦争のせいで若い青年は兵として徴兵され、税は上がり、暮らしは貧しく。魔族からの戦争だと信じて疑わない民は、平和がくればと、

それでもと身を粉にして働いて……魔獣を倒しただけで、あんなに、喜んでくれた。

「駄目！」

止めなければ。

止められるかも分からないが、関係の無い人まで巻き込むのは嫌だ！

温くて結構。こちらら、16年間戦争とか争いとは無縁の土地で生きているのだ。

「私、止めてくる！リーヴはどこ!？」

鬼気迫る声に気圧されたのか、たじろぐヒュールに代わり、スルリとイオリの手から地面に着地した子犬が付いて来いとばかりに走り出す。

それを、イオリは全速力で追って駆け出した。

その八歩

行き当たりばったりで戻らなくて良かった！

イオリは目の前を先導して走ってくれる小さなまっくろもふもふの子犬に感謝した。

何せ、本当にこの魔王城は意思を持って動いているんじゃないかなるかと思いたくなる程、城内の様子がくるくると変わるのだ。

唯一まともな道筋は、城の入り口から玉座の間にかけての距離くらいに思える。

だからイオリは、迷わずに玉座の間まで行けた訳である。魔王城の内部全てがこうなら、対決云々の前に迷子になっていたかもしれない。

迷子の迷子の《勇者》さん、あなたのおうちはどこですか？

懐かしいフレーズの替え歌がふと脳裏に浮かび、イオリは子犬姿のアンクノウンを追う足は止めない俛、少々遠い目をした。駄目だ、リアル過ぎてわらえねえ！

それにしても、とイオリは周囲に視線を巡らせた。

魔王城には警備の兵や、メイドさんのような格好をした人が複数常駐して居るようなのだが、目的の場所に近付いて行くに従い、壁に寄りかかっていたりだとか床にしゃがみ込んでいたりだとか、とにかく皆々顔色が真っ青で体調が優れないらしい。

イオリが広間から飛び出した時は、こんな風ではなかったのだから、《魔王》リヴェンツェルが力の制御を行う封冠符ふうかんぷと呼ばれるものを外した事に何かしらの原因がありそうではあるのだが、如何せんイオリは何ともないので判断しようがない。

そういえば、庭園を駆け出した時は追い掛けるのがやっとくらいだった子犬の走る速度も、心なしか鈍くなっているような……。

イオリには精霊の加護が付いている為、寒さ暑さ或いは呪術の類に渡るまである程度の耐性があるのだが、それのお陰なのか、それとも単に自分が鈍いだけなのか。

……自分の尊厳のためにも、前者という事にしておこう。鈍くないぞ、決して。

「くろちゃん！……大丈夫？」

見覚えのある扉の前までやっと辿り着いたと思ったら、立ち止まった子犬の毛が警戒している猫のようにブワリと逆立ち、小さな身体がブルブルと震えだした。

イオリは慌てて子犬を抱き上げると、小刻みに震える身体を撫でて结界魔法を掛けてやる。こうすれば多少の強い気配も耐えられる筈だ。

どうやらイオリの魔法は子犬　アंकノウンに効いたらしい。ぐったりとはしているが、震えの落ち着き始めた身体を扉から少し離れた壁際にそっと横たえた。クルリと身を丸める姿を見届けてから、イオリは扉の前に立った。

「恥ずかしいとか言ってる場合じゃないよね、うん。　ハタ迷惑な《魔王》を止めないと」

つい先程まで泣いていたのだ。鏡が無い為分からないというか、余り確認したくないがきつと顔は酷いことになっている。

だが、帝国を滅ぼすだの、味方だろうに城の人まであんなふうに

するとは言語道断である！どうやら普段通り動けるのはイオリだけ
のようだし、頭の一つ引っ叩いて早く封冠符を付けてやるうそうし
よう。

大きな扉はイオリだけでは開けないが、両手に”風”を纏わせる
と、暴風を叩き付ける勢いで広間へ通じる扉を押し開いた。

「リー……ひえっ!？」

警備の兵は泡を吹いて倒れ伏しており、ピクリとも動かないし、
広間に残っていた”六柱”の四人ですらテーブルに突っ伏している。
一番体格の良い”死神”のアンデルベリでさえ、そうなのだ。
死屍累々！？とイオリが心の中で悲鳴を上げたのも致し方ある
まい。

だが、よくよく見ると皆苦しそうではあるが息をしている。
思わずほっと安堵したイオリだが、すぐに思い直した。そして、
心なし強めた視線をギツと一人悠々と椅子に座る《魔王》へと向け
た。

黒いマントが何とも言えず似合っていますね……じゃなくて！

「リーヴ！何してるのっ！」

「イオ」

ガーネット
柘榴石色の瞳がイオリを見ると、少し驚いたように見開かれて、
次には愛おしいものを見るような、蕩けるような視線でイオリへと

注がれた。

これだけで、既にイオリの精神的なゲージがただ下がりにいる心地がする。

うはああああ、そんな目で見ないで下さい滅茶苦茶居心地悪いというか照れる！

本来なら、こんな奇麗な人にこんな声で名前を呼ばれたら悶絶モノなのだが。

必死に自分を奮い立たせると、イオリはリヴェンツェルの座る椅子の傍へと駆け寄った。

「俺は何もしていないよ？」

「何もって……ヒュールから聞いたよ。封冠符を外したんでしょ？」

イオリが見る範囲では、ピアスやネックレスなどの装飾品……本来は封冠符と呼ばれる道具を、リヴェンツェルは何も身に付けていない。

「だからこそ”六柱”を始めとする魔族でも、《魔王》の力にあてられて、動けないほど弱ってしまっているのだから。」

「ふうん、ヒュールね……」

地を這うような不穏な気は聞こえない事にするとうとう。

後から冥福を祈っておこう、とイオリは《魔王》の声を無視することにした。

「とっ、とにかく、封冠符 ををををっ！！？」

唐突に視界が反転し、声が裏返る。

座っている状態から一体どうやって、と褒めたくなる程鮮やかな手付きでイオリはリヴェンツェルの膝上へ座らされた事に気付いたのは、間近で輝く石榴石色の瞳と端正な顔に一瞬思考を放棄した後だった。

「まままつま前と違って何かスキンシップが激しいですね！でも私は日本人であって、欧米のスキンシップには慣れていないんですよ！まずはお辞儀からの国出身なんです！」

「イオは面白いなあ。はい、コレが封冠符……イオリが着けて？」

思考が崩壊した俣、あわあわと狼狽するイオリをリヴェンツェルは目を細めて見ると、徐にイオリの手へ幾つものアクセサリーを手渡した。

ピアスにネックレス、指輪や深い闇の色を湛えた、黒石の装身具アクセサリー。不思議な色で時折揺れる封冠符に見入っていたのは少しだけで、イオリはぎよっとリヴェンツェルへ顔を持ち上げて 直ぐに俯けた。ちちちち近い近い。

「じ、自分ですればいいとおもいま」

「イオがしてくれなきゃ、嫌。それに、俺はこのままでも構わないしっ？」

イオと二人つきりだしね、と爽やかな声が黒く感じるのは私だけでしょか。

苦しんでいる人達を前にして、平気で居られる程イオリは図太くない。

だからといって、この《魔王》が自分でやるとは最早思えないし……結局、イオリがやらねばならぬのだ。

苦悶している間にも、この唯我独尊な《魔王》様はイオリの髪を

一房梳くつて……その、唇を触れさせて楽しんでいらっしやいました。悶死させる新手の拷問か!?

恥ずかしさの余り泣きそうになる自分を叱咤しつつ、手渡された封冠符を膝の上に落とすと、イオリは心の準備を固めて勢い良く顔を持ち上げた。

「リーヴ!じつとして!」

イオリの黒髪と戯れる顔へ手を添えて、ぐいぐいと上に持ち上げたなら、綺麗な瞳とかち合う羽目になった。自分がやった事とはいえ、物凄い恥ずかしい。

「積極的だね」

「ちがーう!」

この勘違いっこめ!

第三者が見たら、リヴェンツェルの顔を包み込んでいるイオリはその、いろいろとアレな状態に見えない事もないが、そんなやましい気持ちは絶対ない。ないったらない!

真面目に相手をしていたら、いつまで経っても事が進まないと感じたイオリは、嬉しそうに笑うリヴェンツェルの顔を極力見ないようにしながら、まずは封冠符の中でもピアスの形状をしたものから装着してゆくことにした。

右に二つ、左に一つ。イオリはピアスを開けていない為、今一要領を得ないのだが、何とか四苦八苦ししながらピアスホールにピアスを通し、金具で固定させる。

キン!という空気が震える音と共に、少しだけリヴェンツェルの纏う気配が薄らぐ。

封冠符はきちんと効果を発揮しているらしい。この調子で、とピアスの次にネックレスを首周りへ回しながら、（やっぱり恥ずかしくて顔は見れないのだが）イオリはふと浮かんだ疑問を《魔王》へ問い掛けた。

「……どうして、帝国を滅ぼすなんて言ったの？」

「それも、ヒュールかな？ 存外お喋りだね、”炎帝”も」

ヒュールの命が縮まった気がする。ら、来世では幸せに。

声だけでいえば、先程と全く変わっていない。激しさはなく、風いだ風のように穏やかなリヴェンツェルの声。

しかし、長年共に過ごしたイオリには、彼が静かに怒りを湛えているように感じられた。

「イオリを傷付けたから」

「……はい？」

「イオリ。イオ、君はね、払わなくて良い対価をこの世界に払っている……本来、払わなければならない者の肩代わりとして、イオは望んでいなかったし、出来もしない約束だけを救いにして、結果、傷付いている」

指先が目尻へそつと触れた。

誘われるようにして、彼の目を見ると、怒りと悲しみと、無力感を湛えたような揺らいだ瞳がイオリと重なった。ああ、この人は自分を責めているんだ。

《魔王》だと言えなかったこと。

元の世界にイオリが戻れないこと。

イオリに言えなかった沢山の事を、この人は。

「俺は、《魔王》だから。壊してしまうしか、出来ない」

紳士的で、器用で、何でもそつなくこなす人だと。
本当は、こんなにも不器用で、沢山悩む人だった。

その九歩（前書き）

沢山のPV、お気に入り登録ありがとうございます！
皆様に読んで頂いて、魔王様も勇者も幸せ者です）、*（

その九歩

イオリに触れる時は、躊躇いとか恥じらいとか全く無しで。こつちが恥ずかしくなるくらいベタベタしてくるのに。

こんな時だけ、まるでイオリが消えてしまっただけじゃなかった恐れているように、触れる手付きは恐る恐るなのだ。

今だってそう。リヴェンツェルの人差し指が目尻に触れているけれど、触れているのかわからないのか分からないくらい、そつと、そつと、肌だけに掠めるように、触れている。

強く触ると、壊れてしまおうと言いたげに。

「リーヴって……ばかだなあー」

思わず心の声がぼろっと出てしまった。

あ、びっくりしてる。切れ長の瞳が少しだけ見開かれて、ガーネット柶榴石色にイオリの瞳の色が映り込む。赤と青が、不思議に瞬いて、混じり合う。

細い銀環に黒石が輝くふうかんぷ封冠符を細いけれど、女性とは違うしっかりした片手の手首に填めてから、イオリは少しだけ目尻を細めて直ぐ近くの瞳を見上げた。

空気の震える音を残して、また少し《魔王》の力は抑えられる。

「壊すだけじゃないよ」

空の青さ、朝日の眩しさ。

夜の静寂。まじし

笑顔になること、誰かを心配すること。

照れたり、怒ったり、泣いたり。

想い、願い、決意。

全部、全部。

この世界を憎んでいた、私に。

あなたが、わたしにくれたもの。

「リーヴは私に沢山、くれたの」

ありがとう。

あなたが居なければ、きっと私は狂っていた。

理不尽さに、ぶつけられない憎悪に、暗い焔に焦がされて。

それでも、あなたが《魔王》の枷に苦しむのなら、ねえ、私は《勇者》だよ？

《魔王》を止めるのは、《勇者》の役目でしょ？

「それに、何でも壊そうとするなんて《勇者》の私が許さないからね。……ふふー、ほら、つかまえた！」

最後の封冠符がリヴェンツェルの身に装着されると、硝子を金属で叩いた時のようなキーンという音が最後に響いて、たゆたっていた魔力が《魔王》の中に封じられた。

机に突っ伏していた“六柱”の四人も、強い魔力から解放されて軽く呻き声を上げながらゆっくり起き始めている。この調子なら、城の皆や広間の扉前で丸くなっている筈のアंकノウンもじきに回復するだろう。

よしよし、当初の目的は果たさせたぞ。

きちんと機能を果たしているらしき封冠符の装身具アクセサリへ満足気に小鼻を膨らませると、イオリは未だ啞然としているらしいリヴェンツェルの顔を真っ直ぐに見上げた。

「全くもう！リーヴは私がいないと、ダメなんだからー！」

ありがとう。とか、ごめんなさい、はちょっと違う気がした。

だからイオリは少しだけ恥ずかしそうに、それでも、わざとらしく胸を張ると、威張るようにそう言って、笑みを浮かべた。

今度は、私があなたの傍に居る番。

恥ずかしくてそんな事言えないから、笑顔に変えて。

「イオリ」

意味が伝わったのか、凝固したように身動き一つしなかった《魔王》は、《勇者》の名を吐息交じりに呼ぶと、少しだけ躊躇った後にイオリの頬へと掌を触れさせた。

温かい人の体温が肌から伝わってくる。珍しく緊張しているのか、《魔王》の手は少しだけ強張っていた。

「……イオ、君は」

深い色を湛えた柘榴石色カーネットの瞳が揺らいで。

まるで、泣いているよう。

「俺の、傍に？」

何だか”死神”のアンデルベリみたいに片言になっているけど、

まあ多分一緒に居てくれるのか？的なニュアンスだろう。

リヴェンツェルは今迄イオリの傍に居てくれたのだから、今度は自分の番だ。

ただ、やっぱり言葉にするのは恥ずかしいので、神妙に頷くだけだったけれども。

「イオ……イオリ、……」

折角、感動というかお涙頂戴の場面だったのに。

頷いた瞬間、思わず前言撤回して謝って逃げ出して、穴を掘って隠れたくなる程イオリの名前を耳元で連呼すると、時には威を宿す瞳が、艶やかにイオリを見据えて　ち、ちちち近付いてえええ！？

「ちよつ、り、リリリーヴッ」

まてまてまてまて！

なんだその凄絶な色気は、今すぐ引つ込めなさい！

おかしいぞ、ここは二人でニッコリ笑い合ってハッピーエンド…

…あれ、おかしいな。さつきよりも距離が近いぞ。

艶っぽい瞳にこれ以上近付かれたらまずい。早く目を逸らさなければと思うのに、まるで魔法を掛けられたように、視線を逸らせない。

彼の手が触れている頬から熱が伝わって、びりびりと痺れるくらいに熱い。

心臓が、破裂しそうなくらい血液を大量に身体中へ巡らせていて、きつと今のイオリは完全に顔が茹で上がっているに違い無い。

近い！近い近い近い！

世界のトップモデルも真つ青なくらいに綺麗な顔立ちをした青年が、蕩けとろそうなくらい熱を持った視線でイオリを捕らえて。手は、

イオリの頬に触れていて。

その、段々近付いて。甘い吐息が、唇に触れる。
気絶するのと、彼の瞳が見えなくなるのは、いったいどちらが先
だろうか。

吐息ではなくて、暖かな温度が　。

「　こんの、馬鹿王！封冠符を外すなどあれほど……」

大音量で広間の大扉が開け放たれると、片手にぐにゃんとしている真つ黒な子犬を引っ掴んだ”炎帝”ヒュールが、肩で息をしながら怒鳴り声を広間に響かせた。

ぴくり、とリヴェンツェルの動きが止まる。その隙にイオリは死に物狂いで《魔王》様の腕の呪縛から逃れて、”六柱”唯一の女性である”氷雪の魔女”ミルカの傍へ世界記録並の素早さで逃げ込んだ。

た、助かった！何て素晴らしいタイミングで来てくれるんだこれからイオリ専属幸運の女神……神様と呼ぼう。

「よしよし、イオリちゃん怖かったわねー」

あんまり恥ずかしくて顔を青くしたり赤くしたりしていると、見かねたミルカが頭を優しく撫でてくれた。滅茶苦茶良い匂いがして、

落ち着く。お姉さんみたいだ。

対するヒュールは落ち着いてもいられないようで、恐ろしい迄に表情を消した《魔王》がゆらりと立ち上がったと思ったら、何の材質で出来ているのかも分からない大扉が……その、一瞬で音も無く破裂して……砂になりました。

静寂。静寂。

体調が回復してやっと立ち上がっていた警備のおにいさんが、再び泡を吹いて昏倒しているのを哀れに思う暇は今のイオリには無かった。

ちよ、なにそれ封冠符効果は？

「ヒュール……」

決して荒げている訳ではないのだが、落ち着いた声には滾る程の冷酷な感情がちらちらと覗き見えて、その威を直接ぶつけられている”炎帝”が顔色を青くした。

ありがとうヒュール、あなたの犠牲は忘れない。南無。

それから、何とかイオリと皆で《魔王》様を宥めたのは暫く後の事。

その九歩（後書き）

宜しければ、評価・感想・アドバイス等よろしくおねがいます^
^

その十歩

白いワンピース（パジャマ的な）に着替えたイオリは、豪華な天蓋付きのベッドに腰掛けて、窓の向こうに広がる暗闇に乾いた笑みを浮かべた。

そう、夜。夜なのだ。

あわや修羅場屍の山となりかけた惨事を、どうにかこうにか元凶であるリヴェンツェルの機嫌を回復させる事で回避した訳だが、結局何やかんやで振り回されて、気付いたら夜になっていた。

驚いて、泣いて、慌てて、照れて　その全部が、《魔王》様関連な気がする。

寝たらずつと沈んでいくんじゃないかというくらいふわふわで、二人寝てもまだ余裕があるくらい大きなベッドも、良く見たら細かな刺繍がびっしりと施されている天蓋も、軽く20畳……それ以上ありそうな室内のあちこちにある調度品も全てが高級品で、旅をしていた間は安宿だったり最悪野宿も経験したイオリにとって、夢のような部屋ではあるのだが。

衝撃的なことを体験しすぎて、最早室内の事にはいちいち驚かなくなってきた。

それよりも身の内にじつとりと溜まっている疲労を何とかしたくて、イオリはベッドに遠慮なくぼふりと身体を倒した。ああ、ふわふわかふか！

色々と考えなければいけない事は沢山あるが、精神的疲労で瞼がもう限界である。

頬に当たる絹布の滑らかな感触に頬を緩めながら、イオリは眠りの手が誘う俣に意識を落としていこうとしたが、突如として室内へ

響き渡ったノック音に嫌々ながら薄目を開いた。

「イオリ」

……寝たふりをしよう。

扉の向こうから遠慮がちに聞こえた声は、紛れも無く《魔王》様の声だった。

決して嫌っている訳では無いのだが、余り男性に免疫の無いイオリにとって、リヴェンツェルのスキンシップは些か過激であり、寝る前にまたあんな事をされた日には不眠になりかねない。

即座にイオリは目を瞑ると、そしらぬ振りですぐベッドに潜り込む。これも安眠の為である。

「イオ」

「ひ」

「いけない子だね、寝たふりなんて」

直ぐ近くから空気を甘く震わせる低い声に慌てて目を開けると、^{ガネット}柘榴石色の瞳がベッドの傍に存在していて、思わずイオリは一瞬意識を飛ばしかけた。

そうだった。確か、イオリが初めて魔王城で目覚めた時も、リヴェンツェルは唐突に現れていたではないか！

天下の《魔王》様には乙女の部屋に入る事のデリカシーとか、節度とか、そんなものを説いても無駄らしい。口元に笑みを浮かべるリヴェンツェルをイオリは睥睨^{へいげい}すると、緩慢に身を起した。

「リーヴ……乙女の部屋に、勝手に入ると嫌われるよ」

「君にさえ嫌われなければ、他はどうでも良いよ」

うわわああ、やぶへびでしたあああああ！

嫌味のつもりだったというのに、返された言葉のほうに逆に自分自身を痛めつけている。

サラリと甘ったるい言葉を吐くりヴェンツェルを他所に、一人悶絶している姿を柵榴石色ガーネットの瞳は面白そうに眺めて居たが、軽い吐息をふうつと吐き出すと、ベッドの端へと腰掛けた。

「イオ」

「なっ……なな、何！」

名前を呼ばただけで心臓が跳ねて、激しく動揺する。

用が無いなら自分の部屋に戻ってください寝かせて下さいお願いしますと心の中で激しく捲くし立てるが、今素直にリヴェンツェルが部屋から出て行ったところで、最早イオリが安眠できそうにないのは自分自身でも嫌という程分かってはいた。

それでも、やっぱりその、き、キスされかけた身としては、二人つきりという状況は非常に心臓に悪い訳で。

「……辛くないか」

「え？」

「昨日の今日で、色々あったから。辛かったら、言っただよ」

思わずイオリはきよとんとしてしまった。

その俣、マジマジと目を見返したら、とても真摯な眼差しが返って来て戸惑う。

それだけ？それを、伝えにきてくれたの？

イオリが泣いていると思ったのかもしれない、二年前のように。

「それだけ、伝えたかったから」

「……ま、まっってリーヴ」

端正な顔へ柔和な笑みを浮かべると、リヴェンツェルはほんの少しだけベッドを揺らして立ち上がるうとした。それを、イオリは咄嗟に伸ばした手でリヴェンツェルの服を摘み、引き止めた。

少し驚いたように見開かれる綺麗な瞳と視線が重なる。自分でも何故手を伸ばしたのか分からない。パツと服から手を離しはしたが、激しく睫毛を瞬かせ、うぐうぐとイオリは喉の奥で呻き声を漏らした。

「私は大丈夫だよ、心配してくれてありがとう」

うつつ、語彙力の少なさに涙が出てくる。

そういえば高校の国語テストはいつも赤点ギリギリだったなあ、と意識が遠くにいきかけるのを抑えながら、イオリはリヴェンツェルに笑い掛けた。

リヴェンツェルが《魔王》でも、彼はイオリの知っている彼だ。こういう小さな気遣いに今迄何度助けてもらっただろう。

「なら、良いんだ……起してしまつて、すまない。もう寝なさい」

綻んだ微笑に思わず鼓動が跳ねる。

決して女性に見える顔では無いのだが、立ち振る舞いや言動、はてはこういった小さなところが妙に色っぽくて、大人の余裕というのだろうか……艶っぽさにイオリは慣れない。

軽く肩を押す動きに合わせてベッドへ横になると、リヴェンツェルはイオリに羽毛の掛け布をそつと掛けた。

その俣出て行くかと思つたら、まるで父親が眠る子供を見守るようにじいっと見詰めてくる為、イオリは心底困つた。この状況でどうやって寝るといふのだ、寝れるわけがない！そこまで凶太く無いぞ。

そう思ったのに。

リヴェンツェルの指先がイオリの髪をそつと撫でる度、眠気がじんわりと忍び寄ってくる。

穏やかな眠気にイオリの瞳がうとうとと重たげに瞬き始め、やが臆て、深い眠りの底に沈んでいった。

「リー…なまえ……教えてくれて、ありがとう……」

ああ、まだおやすみって言ってないのに。

明日起きたら、おやすみの代わりに、おはようを言おう。

ちゃんと、名前を呼んで、おはようって。

記憶の最後に、やさしい囁きが聞こえた気がした。

指先に少しだけ眠りの魔法を宿して髪を撫でると、元々疲れていたのかあつという間にイオリは眠りへと沈んだ。

「おやすみ、イオリ。……愛してる」

リヴェンツェルは小さく囁くと、滑らかな肌の額に唇をそつと触れさせて規則正しい呼吸と共に眠る小さな少女を飽く事無く見詰めた。

こうやって寝顔を見ると、イオリは酷く幼く見える。年齢は18の筈だが、異界の少女だからなのか、身長が小さいからなのか、14歳くらいだと言っても疑われない気がする。

本人に言つと怒り出すので、言いはしないが。

何かの夢を見ているらしく、もにやもにやと何事か寝言を漏らす姿にリヴェンツェルは目尻を細めると、少女を起さないようにして下唇に親指の腹を触れさせた。そのまま、軽く左右へ唇をなぞつてから、立ち上がる。

「さて」

静寂の室内に風は無い。

だというのに、リヴェンツェルの黒髪がフワリと舞っていた。

ヴン、と羽を震わせるような微かな音と共に、リヴェンツェルの数歩先に円陣が浮かび上がった。魔力の流れにゆらゆらと身に纏う黒衣が揺れる。

つい先程まで一人の少女を映していた優しい色の柘榴石ガーネットの瞳は、鉱物のように何処迄も冷たい鋭さを湛えていた。

クツ、と《魔王》の唇に冷淡な笑みが浮かぶ。

「困ったタヌキを、狩りに行こうか」

いつそ愉快気に。

円陣の上へ踏み出すと、《魔王》はその場から掻き消えた。

夜の静寂しじま、闇の時刻。

この間に紡がれた物語を、《勇者》は知らない。

その十一歩（前書き）

主人公視点ではありません。

残酷描写が出てまいりますので、苦手な方はご注意ください。

その十一歩

”真人類帝国”の皇帝は苛立っていた。

皇帝の自室、目に痛い程の赤と金を基調として整えられた室内は、調度品一つとっても一般市民が数年は働かずとも暮らしてゆける程に高価なものである。

その中の一つ。白磁に金の装飾がこれでもか、と施された壺が皇帝の手から飛ばされた赤ワイン入りのワイングラスとぶつかり、床へ落ちて粉々となった。

給仕をしていた侍女が、ヒツと小さく悲鳴を上げて体を竦める。

今の皇帝にはその仕草すら煩わしく、青褪めたその侍女を怒鳴り散らすと、侍女はしきりに頭を下げて謝罪しながら逃げるようにして退出して行った。

89

「一体どうなっているというのだ！《勇者》は何処へ行った！？」

一人、室内でどたどたと室内を歩き回りながら毒吐く。

《勇者》が”魔国”の魔王城へ乗り込んだという報告を間者スパイから受けて、早数日。

倒されればこれ程に重畳な事はないし、もしも《勇者》が《魔王》に敗れて帝国に戻ってきたとしても、適当に反逆の罪でも着せて地下牢獄に幽閉してしまえば良い。

何せ、あの幼く愚かな少女は、「元の世界へ帰してやる」と一言言えば、何でも従順に従う皇帝の人形なのだから。

この世界にあの少女を元の世界へ戻せる者は存在しない。可能性があるとすれば、召喚した魔術師達だろうが……《勇者》を呼び出す為に使用した魔術師達は全て死んでいる。

それにしても、《魔王》が倒されたという報告は無いし、逆に《勇者》が敗れたという報告も無い。いや、ここ暫く間者スパイからの連絡が一切無い事にこそ皇帝は苛立ちを覚えていた。

「あの無能どもめ……与えた仕事すら、満足に出来ぬのか！」

苛々と指に嵌った大粒のダイヤが輝く指輪を弄りながら、皇帝は不愉快気に鼻息荒く一人ごち、再び手近な調度品へワインの瓶を投げ付けた。

硝子が粉々になって床に散らばり、赤い液体がじわじわと高級な絨毯へ広がってゆく様を見ても、皇帝の苛立ちは納まらない。

若い女でも抱いて苛立ちを落ち着かせるしかないと、使用人を呼び付けるべく部屋に設けられた呼び鈴を鳴らそうとした皇帝は、ふと、自分以外の存在が室内に存在している事に気付いた。

「何者だ！」

鋭く叱責の声を飛ばす。しかし、その声は先程と異なり緊張に満ちていた。

皇帝の部屋には数人掛かりで手掛けた、侵入者防止用の結界が張られている筈である。

その結界を破つての浸入ともなれば、相応に力を持った者と判断出来るのだが……奇妙な事に、結界は破られていない。少しでも結

界に傷が付けば、けたたましい鈴の音が響き渡る筈だというのに、室内には寒々しい迄の静寂だけが広がっていた。

だが、皇帝の背には嫌な汗が流れていた。

視線はカーテンの向こう側、部屋の光が僅かに届かぬ闇の領域。

窓辺のカーテンが、風も無いのにふわりと揺らぐ。

カーネット
柘榴石色の瞳。

窓の外に広がる夜の闇と同じ髪。

黒いシャツとズボン姿はいつそ質素。

だというのに、この威圧感は何だ？

まるで、闇すらもこの人物に平伏ひれふしているかのよう。

闇を纏う青年は、淡い笑みを湛えて皇帝をその瞳に映した。

「今晚は、皇帝」

「……此処が私の部屋と知っての狼藉か、その首無いものと思え！」

青年の視線と合った途端、無意識のうちに後ずさっていた身体が憎らしい。

歳若い青年に言い知れない緊張と、恐怖を抱いている事が認め難く、皇帝は乾いた唇を一度舐めると闇を跳ね返すように低い声を轟かせた。

その俣、呼び鈴へ伸ばしていた手を伸ばし、侵入者を知らせるべく鳴らそうと。

「知っているよ、お前が皇帝だとも。二年前から、何も変わらな
い愚かな皇帝」

直ぐ近くで、低い声が何の感情も無く。

耳みみからほんの数センチだけ離れた場所から囁かれる声に、背が
ぞっとする。

馬鹿な！？馬鹿な！！

一体何時の間に、これ程近くまで接近を許した！？

一度として、この男から皇帝は目を離していない。

一度たりとも、視線を外していないのだ。

ならば、一体何時、吐息すら触れる距離にこの男は近付いた？

動く素振りも、魔法を使った素振りも無く、まるでそうある事が
当たり前であるかのように、石榴石色の瞳を持つ侵入者は、皇帝の
直ぐ傍らで艶やかな笑みを湛えた。

「軽く幻惑の魔を掛けただけだったのにな。未だに気付かないな
んて」

ふふ、と心底可笑しそうな笑い声が空気を震わせて耳に届く。

言葉自体は穏やかな響きだが、其処に紛れも無い嘲笑の色を感じ
取り、皇帝は金縛りにあったように動かせなかった身体を勢い良く
後退させた。

直後、部屋へ雪崩れ入って来る護衛騎士達の背後に回りこみなが
ら、喚き散らす。

顔には、侮蔑を受けた事に対する怒り。

「侵入者だ！殺せ！」

「おや、物騒だね」

幾つもの剣を向けられながら、対する青年は随分とのんびりして見えた。

だが、騎士達の目には並々ならぬ警戒が如実に滲む。

ゆったりと立っているだけなのに、隙が全くない。

斬りかかった瞬間に、逆に自分が倒れ伏す想像すら簡単に出来てしまい、騎士達は皆剣こそ構えているが、動き出せずに居た。短時間の間にじっとりと嫌な汗が滲む。

何だ、”これ”は？人なのか？

こんな気配を持つ者が、人なのか？

「何をしている！早く殺せ！お前達も首を斬りたいか！？」

逡巡を断ち切ったのは、皇帝の金切り声に近い命令であった。

我に返った騎士達は、自分達の脳内に響く警鐘を無理矢理に抑え込む。

目で合図を交わし、二人の騎士が頑丈な盾を片手に、剣を振り翳す。

「……可哀想に」

何が。

誰が。

そう、問う間も、疑問に思ふ時間すらも、与えられはしなかった。

一瞬で室内に広がるのは、果てしない闇。触れてはならぬ、狂気に似た一端。果てが、淵が無い、深遠の威。

何の気負いも無く、差し伸べられた青年の片手には、何時の間にか血の色をした一振りの剣が握られていた。ごととん、と何かが落ちる。

「ばけもの……」

放心した騎士達の、一体誰がそう呟いただろう。

侵入者に斬り掛かった二人の騎士は、驚愕の面持ちだけを皆の瞳に焼き付けて、すっぱりと上下を切り裂かれて、床へ転がっていた。鎧も、骨も、肉も、関係無く。奇麗に、すっぱりと二つの肉塊に。

「愚かな皇帝よ、《勇者》に免じて一度だけチャンス機会を与えよう」

騎士も、皇帝も、誰も動けない。

圧倒的な力量、圧倒的な魔力の威に全てが吞まれていた。

「お主……《魔王》……?」

壊れたように全身を戦慄わななさせる皇帝の、息も絶え絶えな声に、フツと《魔王》は微笑んだ。

肯定を示すように。

「俺は、面倒だから全て滅ぼしてしまおうと思っているんだ。でも、彼女がそれを望まなかったから……だから、一度だけ、お前に機会をあげる」

「き、機会……？」

既に皇帝は、《魔王》へ戦を仕掛けた事を後悔していた。父親であった先帝の、生ぬるい”魔国”との友好関係は馬鹿馬鹿しく、病で先帝が死し自分が皇帝になった暁には肥沃な”魔国”の土地を同盟や、友好関係では無く自分の領地として手に入れようと戦を仕掛けた。

だが、それは間違っていた。認識が、甘すぎた。

先帝は生ぬるかったのではない。

《魔王》の力量を知っていて、一番良い方法をとっていたに過ぎないのだ。

《魔王》は”弱くてつまらないから”滅ぼさないだけ。

不興を招けば、自分だけでなく国ごと滅ぼされる……跡形も、無く。

次元が違いすぎる。

これでは、まるで、

「戦を終わらせろ。戦をする暇があるなら、増やした税を民へと戻し、整備を整え魔獣の脅威から民を救え……平和。それこそ、《勇者》が望む事……皇帝よ、お前は彼女が払った対価以上のものを、生涯掛けて払わなければならない」

騎士達が微かに息を飲み込む。

民の大多数は知らないが、騎士達は”禁忌”によって異世界から呼び出された少女の存在を知って居た。矢張り人とは異なる不思議な祝福と力を持ちながらも、決して元の世界には戻れない、空色の瞳を持った少女。

《勇者》は《魔王》の傍に居る。
この場に居た誰もが一瞬で理解した。

「俺は、彼女にだけ跪く。彼女が悲しむ事は 全て、滅ぼすよ」

たとえ、一つの国であってもね。

《魔王》が笑う。だが、楽しそうな面持ちに反して、眼差しは酷く冷酷で。

皇帝は、震えながら頭カブを垂れるしかなかった。

「御言葉の俣ヒに……」

「嗚呼、あと。間者スパイは面倒だから消したよ」

「……！」

帝国でも屈指の実力を誇る闇を駆ける間者すら、《魔王》の手に掛ければ赤子を捻るよりも簡単な事なのだろう。

ついでのように告げられる事実に、皇帝をはじめ、騎士達も改めて自分達との違いを知らしめられる。

「”禁忌”なんて使わないようにね。 今度おかしな事をしたら、彼女が止めてもこの国 灰にする」

空気を揺るがす事なく、ふわりと《魔王》の片手がひるがえ翻る。

ダンツ！と、稲妻のように、皇帝の足元へ突き刺さったのは、《魔王》が持っていた血色の剣だった。

腰を抜かしてその場へたり込む皇帝を眺め、《魔王》は目を細めた。

「《勇者》……イオリは、《魔王》が貰い受ける。お前には、返さない」

《魔王》の足元に転移の為の、魔法陣が浮かび上がる。

皇帝の足元に突き刺さった剣が、粒子となつて砕け散るのを惚けたように眺めていた皇帝は、《魔王》が消える直前に発した言葉を、心底恐ろしいと思った。

「一つだけ、俺はお前に感謝しているんだ。彼女を、この世界に呼んでくれた」

「彼女が、帰れない事を俺は安堵してる。もしも元の世界に帰れるなら……」

「手足を斬り落としてでも、此方に縛り付けたらうから」

その十一歩（後書き）

《魔王》様黒い。黒すぎる…！上記やり取りですが、イオリは勿論知りません。6 / 2 3 若干文章編集。

その十二歩

清々しい朝日の光が大きな窓辺から差し込み、ベッドにも明るい日差しを注ぐと、イオリは眩しさに意識を浮上させた。

寝ぼけている思考に、直射日光は些か強烈である。

眠気も相俟つて、二度寝をするべくベッドに潜り込もうとしてみなにやら動けない。

「……ふ？」

寝返りを打とうにも、硬い何かに身体を包まれている。

イオリは低血圧気味で、朝が頗る弱すこぶい。

未だに中々開かない瞼を、苦勞して薄く押し開いたイオリの視界に飛び込んできたのは、白い”壁”であった。

「……んー……？」

ベッドに壁？

まさか、寝相が悪すぎて床と仲良くなっているのかとも思ったが、どうやらそうではないらしい。床にしては柔らかく、じんわりと温かい。

中々明瞭にならない視界をやっとこさ上へと持ち上げたイオリは、思わず硬直した。

「……ッ……！?!?!？」

絶叫しかけた言葉を、すんでのところで飲み込んだのは、我ながら天晴あまじれだと思つ。

眠気など、一瞬のうちに遠い彼方へ吹き飛んでいた。

吐息が掛かる程近くに、端正な《魔王》様の顔。

何故かイオリは、眠るリヴェンツェルにすっかりと抱き締められて、同じベッドで情眼を貪っていたのだ。眠った時には、確かに一人だったのに！

試しに、リヴェンツェルを起さないようにして、腕の中から抜け出してみようと試みてはみたが、少し身体が離れた途端に再び抱き寄せられてしまい、お手上げである。

うぐうぐ、とイオリは喉の奥で情けない呻き声を漏らした。

なにがどうしてこうなった。人知の及ばないところで神とやらが悪戯を仕掛けているとしか思えない……等と、イオリは現実逃避しかけたが、目前にて長い睫毛を伏せ眠るリヴェンツェルへ視線が吸い寄せられる。

白く柔らかい枕と、シーツに広がるサラサラとした漆黒の髪。

今は伏せられているが、瞼の下には柘榴石ガーネットのような、煌く瞳。

顔の作りも整っていて、朝日に薄らと照らされる姿など、精巧な人形にすら見える。

非の打ちどころが無い。というか、無さ過ぎて逆に怖い。

こうやって見ると、いかに普段リヴェンツェルは表情豊かなのか
と思知らされる。

笑っていても、怒っていても、何時もリヴェンツェルの双眸は柔
くたわ撫められているからこそ、イオリは怖さを感じなかったのだ。

それにしても、とイオリは思った。

表情の全く無いリヴェンツェルは怖いのだが……その、両手はし

っかりとイオリの身体に回されている訳で。そこだけ、妙に子供っぽい。

普段は、イオリが赤面した挙句憤死しそうな言葉の数々をサラリと言った挙句、過剰に次ぐ過剰なスキンシップで毎度イオリの寿命を縮めるくせに、今眠る姿は何処か別人のよう。

時折小さく震える長い睫毛を、イオリは微笑ましい思いで見詰めた。

相手は寝ているのだ、折角の安眠を妨害するのはいただけな、

「……そんなに顔を近付けられたら、キスしちゃうよ?」

綺麗な、ガーネット石榴石色の瞳が。

イオリの空色の瞳と、間近で混ざり合って。

「じゅわん……」

「……ごめんなさい」
「いいよ、怒ってないから」

イオリは、海よりも深く、深く猛省していた。

眠っていたとばかり思い込んでいたリヴェンツェルは、どうやらとつくに御起床されていたらしく、しげしげと顔を覗き込んでいたイオリと間近で対面する事になった。

相変わらず余裕綽々の《魔王》様に比べ、頭の中が光速で真っ白になったイオリは、本能が叫ぶ俣に絶叫を上げ、何事かと室内へ飛び込んできた近衛の兵士達にこれまた悲鳴を上げ、朝から大騒ぎした訳なのだが。

部屋のすみっこに縮こまり、野良猫よろしくフーツと警戒するイオリへ苦笑しながらリヴェンツェルの言った言葉にイオリは目を点にした。

即ち、「此处、俺の部屋だよ」と。

愕然^{がくぜん}として室内を見渡すと、なるほどイオリに宛がわれた部屋とは内装が異なり、全体的にモノトーンな色調で整えられている。

何事かと室内へ雪崩れ込んできた近衛の兵士達も、原因がイオリであると分かった途端に込み上げる笑いを噛み殺すような微妙な表情で見ってくるし、《魔王》様は何やら非常にご機嫌でいらっしやるし、余りの恥ずかしさにイオリは部屋を飛び出して自室に逃げ込んだ訳なのだが。

心配した”六柱”のミルカとアンデルベリによって広間へと連れて来られ、未だに狼狽えるイオリをよそに、小憎らしくなる程飄然としたリヴェンツェルによると、どうやらイオリは昨晚寝惚けて部屋を間違ひ、あるところかリヴェンツェルのベッドに自ら潜り込んできたらしい。

全然覚えていない。が、起きた場所がイオリの部屋にとされた場所ではない以上、言い訳する事も出来ないし、なにより低血圧なイオリが寝惚けている状態だと、絶対にならない！なんて自信を持って言えない辺り、今すぐにも穴があつたら入りたい。

穴が無いなら掘つてでも潜り込んで、数日出て来たくない。

「イオリちゃんは可愛いわねえ、きつと、怖い夢でも見たんじゃないかしら？」

胸元が大きく開いた黒いドレスに身を包み、今日もナイスなバデイを惜しげもなく晒したミルカが、朝食のサラダを優雅に食べながら、妹を見るような目でイオリへと視線を注いだ。

怖い夢を見たらリヴェンツェルのところに行くのか。
それはそれで問題だと思う。

「王……機嫌」

黙々と朝食を食べるアンデルベリが、ふと、手を止めて《魔王》へと金の瞳を向けた。

相変わらずこの”死神”はぶつ切りの単語言葉で要領を得ない。だが、今のイオリにはアンデルベリの言いたい事が容易に想像でき、頭を抱えなくなつた。

これは絶対に「王よ、今日は頗る機嫌が良いですね」だ！

案の定、《魔王》様は極上の笑顔を湛えていらっしやいました。

「まさか、イオリから夜這いをしに来てくれるとは思わなかったよ」
誰が！いつ！夜這いなんてした！？

「してません！寝惚けて、部屋を間違えただけ！」

朝日の眩しい時間帯だというのに、こわくてき 蠱惑的な笑みを湛えて艶っぽく笑う《魔王》様に、イオリはうそ寒い身の危険を全身に感じ、片手に持っていたフォークをサラダの巨大トマトに突き刺しながら、勢い良く首を振った。

ここで誤解させては、イオリの平穩は訪れない。

大体、この魔王城に居候させてもらうようになってから一月程が経っているが、毎日イオリは驚いたり、焦ったりしてばかりなのである。主な元凶は、言う間でもなかるう。

「冗談だよ。でも……」

剣呑な視線に気付いたのか、ガーネット 石榴石の瞳を片目だけ瞑つむって茶目つ気たっぷりにウインクなぞ寄越してきた《魔王》様に、イオリは軽く溜息を吐き出した。

だが、次の刹那にはその瞳に肉食獣のような、ちろちろと燃えるような炎を垣間見る錯覚を覚え、思わずイオリは壊れた人形よろしくガクガクと首を縦に振る羽目となった。

「次は、容赦しないからね？」

「きつ、気をつけます!!」

小さく、温かな、愛おしい存在。

傍らで無防備に眠っている姿を、何度も晒されては。

我慢なんて、できないから。

ねえ、気をつけて、

男は、誰だって狼だよ？

その十二歩（後書き）

とか言って、魔王様は一睡もできていなかったり（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5448t/>

魔王様のお気に入り

2011年6月26日14時55分発行